

毒消し売りの生活史(4)

佐藤 康行

I はじめに

これまで巻町角田浜に居住している毒消し売りをしてきたおばあさんたちの生活史を明らかにすることによって、彼女たちが形成した独自の「行商文化」を明らかにするとともに、それを通して日本近現代史を再構築することを試みてきた¹⁾。今回は、角田浜のなかで男性が毒消し売りの活動に従事してきた唯一の人を取り上げて、その生活史を明らかにしてみたい。男性の行商活動と行商の性格を明らかにすることによって、これまで明らかにしてきた女性の「行商文化」をジェンダーの視点から眺めてみるができると思われる。

本調査研究の方法について補足しておく、本研究は対話という共同作業によって「当事者性の科学」を目指す立場に立っている²⁾。従来は調査者が被調査者から聞き取りをし、そのなかから科学的手法によって「客観的な事実」を提示するという手法が主に採られてきた。しかし、こんにちこうした調査の認識論および方法は、研究者自身の認識論的反省から疑問視されている。そのなかで、調査者と被調査の対話という共同作業の過程を通して事実を構築しているという手法が現れている。本調査研究もまたこうした姿勢につらなるものである。

今回取り上げる人は、斎藤牛雄さんで大正14年生まれである。屋号は久右衛門、江戸時代の享和年間以前から角田に家がある旧家の1軒である。斎藤さんはかつては農業と漁業をしていたが、妻が病気になって毒消しの行商ができなくなったので、代わりに掛け売りしていたものの集金をしに行ったのがきっかけで、その後毒消し売りの行商に行くようになった。こうして、斎藤さんは昭和45年から平成5年までの20年余の間、吉田町の小林開益堂の配置販売員として毒消し売りをしてきたのである。

II 毒消し売りの生活史

<男の子の仕事>

男の人っていうのは、まあ、学校終われば田圃や畑へ、まあ、田圃や畑は女の人もやったけども、主に船に乗って漁に出ていた。(この村では)親がほとんど漁師。この部落は。おれたち、漁師やらないって人は、さあ本当に数少なかったからね。ほとんどの人たちは、まあ、なんらかのかたちで、海に携わったからね。

(男の子は)家の中の仕事というよりやっぱり、外の仕事を、小さい頃から教えられたね。漁

とか、それから、野山、田圃、畑。それから山林の手入れとか。まあ、山林の手入れなんかは、
女たちも多少手伝いたけれども、大体に男の仕事だった、山の仕事は。

あの、小さな頃はね、学校終わるまでってのは、ただ海に遊びに行って、漁師の人たちが仕事しているのを見るだけさ。自分でその、漁に携わるまでの間ってのは、仕事って、子供の頃は仕事ないもの。ただ、見て、見て覚えるんだね、あれ。

家の中の仕事？ 男たち、男の子供の仕事っていうのは、そうねえ、家の中。うちあたりは、親父が厳しかったから、よくあの、このへん拭き掃除はやらせられた。(大晦日だけ) じゃなくして、毎日。ええ。大体、おふくろも案外厳しかったし。で、今みたいにこの部屋なんか、ま、冬場になればこうして畳敷くけども、夏場はほとんど板の間だからね。畳上げとくから。この、こいだけのところ、子供に拭けっていったら、雑巾10回も絞らなければ、拭き切れねえもの。それから、その廊下とかさ。拭く所いっぱいあったもの。(拭き掃除は) いや、女もやったよ。うん、まあ子供の仕事だったね。

この表の方ね、ほとんど私は、まあ大きくなってから、自分で掃除するようになったけれども、表の、掃いたり、草をむしったりなんかするのは、大体に大人の仕事だったね。子供はあんまり、その、草むしりとか、落ち葉を拾う、あれするとか、そういうことはあんまりやらなかった。

(水汲みは女の仕事でしたか) あの、一般的に女の仕事でした。ところが、おれが結婚して子供ができてからというのは、女房が毒消し屋に出ていったもんだからね、水汲みとか、全部おれの仕事でした。おふくろは孫がいるもんだから、風呂の水汲みはほとんど自分の仕事だった。それで、なんとか風呂の水汲みから解放しなくちゃならんなど、それでね、自家製のポンプが新聞に載ったったことがあった。それで、バスに載って新潟に行った。大谷商会に行ったらあったんで、ここまで持って来てもらったのがちょうど昭和30年だった。一番早いもんじゃあない、あれからしばらくなかったからね。おふくろがね、「水までお金かけて飲むようになった」みたいなことを皮肉みたいなことを言ってたけどね。

(女が毒消しに出ている間は、男は家事しなかったんでしょか) それは、だって、やらざるをえないでしょう、女房がいないから。昭和20年代にはまだあったね。30年頃になると、だいぶ様変わりしてきたけれど。(家事は) 20年代はまだびっしりあった。戦前は同じでした。だって、いないんだもの、自分でやらなくちゃならない。炊事・洗濯すべて。(ただし、おばあさんがいた場合は) おばあさんがする。水汲みのような重い仕事は男がして。全部が全部というわけじゃないけど、(男が) 別に台所に立ってもおかしくないんだと、この土地に住んでいる人たちはそういうふうに関念づけられていたみたいだったね。まさか、子供に食わせないわけにはいかないしね。子供たちはほんとうに忙しい時は7時でも8時でも、待ってなきゃならないし。腹すいて、親たちが帰ってこなければ、ごはんを自分で握って食うことはしてきました。

(魚を売りに行くのは女と決まっていたのでしょうか) 男はまず行かなかったね。(男が売りに行かなかったのには何か理由があるのでしょうか) そうだね、一番手っとり早い理由というのは、やはり人様に頭を下げるのがいやだったというプライドの問題と恥ずかしくて行けないねとうことだったんじゃないですか。

<網元>

ううんとね、小学校を出てから、昭和15年に尋常高等科を卒業して、それから18年の5月に、戦争に行ってきたの。うーん。あの頃、滋賀に居ただけだね。そいで、終戦後翌年、帰って来たんだわ。

(それまでの間の3年間は) だからあの、漁やったり、野良仕事をずっとやってた。私は、ほとんど、あの、この、春の地引網と秋の地引き網だけやったね。大羽鰯でない。コバ。ええ、チュウバとかさ。それからあの、カタクチ。

遠洋航海の船には乗らんかった。まあ、もちろん、この辺では遠洋航海ってのはあんまり無かったしね。その日、その日、あの、すぐ近くに漁をやって。(乗っていた網元は) 屋号で言う、私はあの、タカミって言う屋号の船やった。タカミ。高い、見る(と書く)。網元は小川って言う人。あの、場所がね、高い所に、ずっと海岸の高い所にあつて。そこを、この部落の人は、その、海の海岸の高い所を、タカミ、タカミっていうその、場所的にその、名付けたったんだ。ちょうどたまたま、そこに家があったもんだから、高見の家っていう、そういう、いわば呼び名があった。本家はね、トウハチ、藤の八。

(網元は) えっと、この部落には、(全部で) 5つ。5つあったね、はい。(その5つの名前は) 覚えてるよ。あのね、一番西の方から、ハチベイ。八のヘイね。それから、ハンザエモン、それから、いわゆる高見。それから、ヘイザエモン。たいらのザエモン。それから、あれは10、そうだなあ、15年頃から、ショウスケって船ができた。ショウスケ。だから、それで合計5つ。はあ。確かショウスケの船は14人か15人だった。はあ。

あ、大羽鰯(の網元)は、ええとねえ、大羽鰯、私が覚えているのは、大羽鰯は、4つかな。また、あの、グループが違うからね。地引は例えば、高見の船に乗っても、大羽鰯はこっちっていう。それから、地引は、例えば、ヘイザエモンの船に乗っても、あの、大羽鰯は同じグループっていう、同じ船っていう、そういうやっぱりワカサレがあった。はい。ああ、名前はね、ええ一番最初はハチベイだね。大羽鰯はやらなかった。地引だけ、ええ。大羽鰯はね、ええ、ヒコエモン。ヒコエモン。と、ううんと、ええとねえ。あの、網の衆は、網の衆って、網元はいろいろ変わってきたからあれだけでも。それから、あれは、一番最初ヒコエモン。それから、次はええ、サイトウショヘイっていう、所のヘイっていう網元があった。それから、アベジロウザエモン、治めるザエモンね。それから、トクベイ、石田トクベイっていう、徳のヘイ、これが4つだな。

<戦後できた網元>

ずうっと、鰯がね、鰯船がねえ、戦後まだ増えて。また仲間でやった人らち（たち）もあるんだな。まあ普通、ハチスケっていう、今は家は無いけどね、この船も1つできた。戦後、新しく。それで、大羽鰯を、まあ現在だって個人一人であの、網を持って出る家はあるけれども。共同で、何人かで、ええ、出るってのは、この前のね、昭和30、30何年だったかなあ、ちょっとど忘れしたけども。30年代に、その、鰯が3年くらいほとんど取れない時期があったんだよ。いくら、その、出ても鰯がさっぱり捕れないって時期があつて。それで、一つ無くなり、また一つ無くなりして、一番最後まで。ええ、ま、頑張ったっていうか、つかまったのは、3年か4年ぐらいたってからだかな。とうとう無くなった。うん、だから30年代、30年の後半だと、確かに思ったんだけどねえ。共同で大羽鰯を取るっていう船は、ほとんど無くなった。

地引はねえ、まだずうっとやっていた。うん。ええと、地引鰯を取らなくなったのは、40、45年、45年におれが行商に行ったんだから、あれは、鰯を取る、44年頃までであったね。はあ、その前の年くらいまでであった。

<家族送金>

2等水兵の頃は5円10銭だったのかな、それが1等水平になると11円だったんです。（家族送金は）おれの場合は、全部俸給は家に送っていた。受け取ったのは、航海手当とか、そういう手当は受け取っていたんです。確かほかに俸給というのがあった。もともと、それがはいつていて、残りがこれだけだとして渡されたんだらうけどね。（みんな家族送金してたんでしょうか）いや、俸給を家に送るようにしたというのは少ないみたいだよ。（牛雄さんの場合は、家族送金した金額が）なんかね、親父が2,000円くらいあったという話だよ。

（恩給は）ちーとばかり足らんでね、恩欠の組さ。いちいち役場に行ってああでもないこうでもないと言うのも面倒くさかったし、おれみたいな立場で貰えるとは思わなかったし、また見たくもねえし。だから、調べもしないしね。

<捕虜生活>

（終戦で帰ってきたのは）20年の2月。翌年。あ、20年でねえ、21年。

（終戦になっても）うん、帰れなくて。ううん、だから、ええ、正式から言うと、戦争終わったのが分かったのが、8月16日だった。それから、だから翌年の2月まで。ええ、ま、結局アメリカの方へやったわけ。

（それで、終戦を迎えたのは）パラオ。実際、アメリカの兵隊がパラオへ上陸したのは、9月頃だったかな。20年の9月。フィリピンはそのずっと前に、あれ、玉砕したもんだから。上陸はしておったんだけど、パラオの本島へは。本島って言うより、コロールの島へは、9月、9月だな。戦争終わってから、彼ら上がって来たもの。

それはねえ、彼らの、監視下、いわゆる捕虜生活始まったのは20年、21年頃、1月1日から。それまでは、自分たちだけで、結局、ジャングルの中で、暮らしたただけだよね。なん

かコロールの島で、爆撃されて、あの、半分燃えたような家がいっぱいあったんだよ。その焼け跡の整備だって言って。その、コロールの島へ、移ってから、彼らの、あの、監視下に、ええ。ま、監視って言ったって、別にその、売り物（うりもん）があるわけじゃなし。ええ、側にいるわけじゃなしにね。

ええ、いや全く自由だった。それで、その、いわゆるキャンプだったしね。食料は、そうそう。今度、結局、アメリカの食料を。まあ、朝とお昼は、いわゆる携行食、軽食だったし。夜は、だけど、米の、ご飯ではなかったけども、なんかおじやのようなやつ、夜はそうだったね。ええ。それ、おじやだったって、味噌、味噌でなかったような気がするけどなあ。いわゆる日本のおじやと、ちょっとひと味違ったけどね。でも、材料は、なんか贅沢な材料を使って作ったみたい。作るの、日本の宿兵が、作ったんだけどね。原料は、だから、向こうからくるわけ。

戦死ってのは、戦死はね、ほんとに弾にやられたって人は3人ぐらいしかいなかったんだけど。食べ物が無くて餓死したのが30、36人か7人餓死したの。150人の中で。その、パラオのジャングルの中に入った時はね、はい。で、末期、戦争末期になってから餓死始まってね。戦争終わってからも、かなりの数が死んだもの。ええ。

<志願兵>

志願したのは18歳。いや、17歳で志願して、18歳で入ったんだな、昭和18年。（志願したのは）いや、別にその、どうだったってえ、どうってことないんだけど。一般的ないわゆる風潮がそうだったからねえ、うん。あの頃の世間一般の風潮ってのは、いまでも悔やまれるんだけども、だいたい年になれば、軍隊に入るもんだという、入らなければ、なんか、こう白い目で見られるような情勢であったことは間違いない。だから、親父は口には出さなかったけれど、最初から最後まで（長男の牛雄さんが志願したことに）反対であったことは間違いない。それは、とうとう口には出さなかったけどね。

<軍国体制>

（国防婦人会の支部みたいなものは）あったよ。「どんかい」と言ってね。（どの家の女性も入っていた）全部。本人の意思というよりも、そういう枠のなかに組込んでいったからね。（在郷軍人会は力を持っていたと思うんですが）そりゃあ持っていたよ。在郷軍人会の郡会長なんていうと元下司官だからね。在郷軍人会の会長はほとんど陸軍出身で、海軍の出身者がしたというのは聞いたことがないし、おそらくなかったんじゃないのかな。（在郷軍人会の人は村の行事にも参加したり）もちろん。（学校の行事にも）そういう公の行事には必ずといっていいほど来ていたよ。（小学校では教育勅語を読み聞かせたということはないんでしょうか）それは六大節といって、当時は元旦から紀元節から、天皇誕生節には必ず教育勅語を読み上げなければ式にならないからね。

（当時まだ義勇隊は作られていなかったのですか）いや、もうあったよ。満蒙義勇軍というの

があった。それから、愛国婦人会、国防婦人会というのはあった。(出兵では村人が旗を振って見送ったりして、村をあげて戦争に協力したような) そういう情勢は確かにあった。(この、村では兵役拒否者はいたんですか) 私は聞いていませんね。その当時の、まあ18だから、親父たちと親父を取り巻くやつを、その、政治情勢というやつを、ちよくちよく選挙かなんかあって聞いたんだがね。当時の角田には民政党と憲政会のあれが、2つの政党が角田にはありましたよ。支部みたいなのが。そのなかで、民政党の人たちは、角田のなかの親父とか何とかというのではなくして、どっかにいって、こうやったみたいだな。憲政会は憲政会でどっかに行ってやったみたいだな。で、憲政会でも、民政党よりも、物持ちの人が多かったみたいです。で、過去にはいっぱいあったんだけど、落ちぶれて、いまはなくなったというような人たちが民政党を支持していたようだね。選挙があると、なんかこそこそ集まっている覚えがあるみたいだ。

(当時はどの政党も戦争に協力的だったのでしょうか) 戦争の段階になった時、無産党という言葉聞いたことがあるけれども。無産党というのが戦争に反対しているんだということを、親父がなんかの時、誰かとしゃべっているのを、そばで聞いたったことがあるけどね。当時、戦争に反対した階級はあったといえば確かにあったんだ。当時、親父は無産党という言葉を使っていた。角田ではそれ(民政党と憲政会)一色です。それ以外の思想はなかったね。

昭和16年に、企業統制令³⁾とかっていうあれがでてね。毒消屋に行くにも、一人ひとりで行くにも、そこの場所の知事に対して、「私はそこにいきます」という認可だか、許可だかを貰う仕事が、えらい仕事があつてね。ちょうど私が昭和15年に、それがでたんだ。当時の高等小学校を卒業したもんだから、部落の50～60人くらい、あそこの家の誰々はどこどこに行ってるんだから、細かい所まで全部あれして、そこの県庁に申請する申請書をあれする経験がある。それは毒消しだけ。大工もいたったけどもね、大工は企業統制令にひっかからなかった。あれは純然たる労働だからね。

(出兵する時に村の行事はあるか) この部落だけで、杜行会というやつを必ず開いてくれたね。当時、そこに分校があったから、分校の体育館で杜行会を開いてもらった記憶がある。全部そうしたんでねえかな。

(当時の戦争の理解としては、家族を守るんだということでしょうか、それとも国家を守るんだということでしょうか) いや、それは、家族や何を犠牲にしても、国家を守るんだという、そういう見方だったね。それで統一されていたみたい。だから、人間一人ひとりのことを全部犠牲にしてもという、そういう体制だったね。

(杜行会でいろいろな立場の人の挨拶はあったのですか) この部落の場合は、区長とかさ、在郷軍人会の分会長とかさ、ここから村の助役だとか収入役とかに出てたから、そういう人たちが角田のことだからというので来て、小学校の分教場の主任が挨拶したりさ、そういうことしてたよ。

< 志願した動機 >

(志願した動機は) あの時莫然としたなかで、あの国家を守らんといかんというそういう意思よりも、みんな、あの、学校終わると上の学校行ったりさ、東京に働きに行ったりさ、何かしてたわけだ。で、高等科の1年生になってからだったかな、先生が、当時旧制だから、「中学校に入ったらどうだ」と担任の先生に言われてさ。「中学入ったらどうか」って、いかれるわけないし。「だめだ、うちあたりの貧乏では、貧乏人が学校なんて、どうして、学校なんてだいたい想像つかないし、考えたことねえ」って言って。「じゃあ、おれと一緒に親の所に頼みに来てあげる」というので、頼みに来たんだけど。先生が来た時は「そうだねえ」って、返事はしたみたいだったけども、実際にやっぱり学校に出すってことになれば、金の問題がひっかかってくるわけだからね。それで、実現しなかったんですよ。やっぱり、出て自分なりに(家業の農漁業とは)違ったことをしてみたいという希望が、当時あったね、確かに。

(自分の力を試したい、発揮したいという) そういう意思是十分あったね。(長男であれば、家業を継ぐことが) それはもう確実に決まっていた。なんかして違ったことをしてみたかったことはあった。いまでも、その気持ちに変わりはないけどね。だから、(父親が)「うん」と言わなくても、自分で志願書を書いて出したんだからね。(家を継ぐ前に自分の能力を試したかったという) それは、確かにあった。

(通信兵を選んだのは) それはね、志願する時に通信兵は点数が一番多くなければならなかったんですよ。一番むずかしかった。17、18だったから、もう2、3年しゃばにいたったから、分かっているわけだ。わざわざそれに挑戦したんさ。だめだったら、何でもいいというような。

(通信兵の訓練を受けたのは) うーん、あの、海軍だったからねえ。そうそう、あの、舞鶴入ってさ、舞鶴で。あれ、2ヶ月あまりその、新兵の訓練を受けて。それから、久里浜(クリハマ)の通信学校、海軍通信学校行って、通信学校で8ヶ月、暮らして。最初から電信兵。電信兵を志願したの。海軍の電信兵っていう。

(長男なので跡取りとして) 大事だったかどうかわからんけれども。やっぱそういうしきたりだからね。(長男が志願兵になることについては) いや、ましてやおれの父親なんか、その、年を取ってからの子供だったから、いや、よくよく、最後まで「うん」と言わなかったもん。いや、まだその、何でなんてことは言わなかったけどね。そのかわり、「うん」て、それも行く朝になってもあれだもの、「うん」って言わなかったもの。「行くんだったら勝手に行け」っていうような調子だった。(父親の権力は) いや、うちあたりは絶対だったね。うん、全てのところでそうだったね。

< 大家族の生活 >

(乗り組む船については) いや、それはあの、もう、おれの場合は、父親もそうだったから。同じ船に運転手したったから、自然的にそうなった。それはあの、うちだけじゃなくして。どこの家でも、親は大体はその家の船やったら、その跡取り、いわゆる倅っていうのも、自然的

にそうなんだよ。おれ今度こっちの船に乗る、なんてことはなかった。次男坊、三男坊、分家する場合は別だったけども。次男坊、三男坊は、その、船に、こういう、漁師をやらなかったもの。だから、大工とかさ、左官（シャカン）とかっていう、仕事の違ったところをえらんで。はい。うん、結局、そういうのが多かったね。あの、出稼ぎに出たね。（その点では、長男と違う）そいで全然違う。

（大工の出稼ぎ先は）うーん、大体にその、前から先輩とかさあ、あー、トウカカ（父母）、たとえば関東。ここの、部落の場合は、ほとんど関東が多かったね。そこに、もう、いわゆる次男三男で行って、そこで居を構えて、ある程度時間を持ってるところへ。結局、大工やったら、最低5年くらい、年季、いわゆる年季奉公っての、奉公するわけだ。仕事覚えるためにね。左官もその通り。だから、あの、そういう形で、そこ、つてを頼っていたわけだ。まあ、終戦後は今度、いろいろ変わってきて、例えば、大きな船に余計、人がどんどん乗ったしね。これは今度、大きな船だからこじじゃなくして、北海道でも、千島でも、どこでも行ったわけだ。

（終戦で帰国した時の家族は）んー、まだだって妹も弟も、学校だったし。（父親は妻が亡くなって再婚したので）腹違いの姉2人もまだここにおったしね。大家族だったよ。おれの。おれのおじいさん、おばあさんは、もうおれが小さい（頃亡くなったので）、おじいさんは分からないし。おばあさんは、昭和4年、3年か、4年に、ちらーっとしか覚えてないけど、その時、亡くなったしね。だから、私が3つか4つ、なんか覚えてるんだから、4つくらいだったと思う、数えてね。（父親は）ああ、あの、百姓やったり、漁師やったりね。田圃と畑、それから山林の手入れね、ええ。ああ、伐採して、木を売った場合は、その後また植えて、下刈りをして備蓄成木（びちくせいばく）させる仕事は、今度はさ、後が大変だ。（それは共有林ではなくて）自分の山だけね。

<実家の家屋>

（家を建てたのは）これ、ううんと、明治28年だと思うな。まああの、父親が、17の時だったから。父親の生まれが、明治11年だから、だからちょうど28年くらいになるのかな。（離れは）あの、そっちの方は、まだ新しいですよ。その間（ま）は、台所って言う。あと、ここと、この後ろにあるのは、寝間。寝床、寝室だ。（玄関の）土間の所は、庭、庭って言った。私が子供の頃は、その、いわゆる土間は、まだ土を入れてね、土をこう固めた、あの、固めてあるだけだった。そいで、コンクリにしたのは、そうだなあ、昭和何年頃だったかなあ、10年、昭和10年頃かな。昭和10年頃かな、コンクリ打ったのは。

（隠居部屋は）うちには無いです。（でも、なかにはある家も）あったね。隠居の部屋、いわゆる隠居部屋言おうか、あの、チュウモンは、あるうちがあったよ。（チュウモンは）なんか、あの、この前の方って言うより、その、屋敷の関係で、後ろの方にあったね。チュウモンはあった。この部屋の向こっかわにあるとか、あるいは、その、台所の向こっかわにあるとかって

う。この、こっちの表廊下から前の方にはチュウモンは付けなかった。

<地元での行商>

うーんと、畑はね、ま、時代によってずっと変わって来るけども。やっば冬作は、今、これから取るものは大根ですね。そいから、大根の間へ、来春収穫するものでは麦、菜種やったね。(戦前も)ほとんどそうだった。

あの、それで、多少は、スイカなんか多少は作ったしね。今みたいに、その、投機的に、一山当ててやろうなんていう考えは、昔は無かったからね。いわゆる麦、菜種で、そいつを売って、お盆の支払いができるようになっていう。そいから、秋は今度、ま、米は、例えば米も売るし、それから、大根なんかほとんど自家用が多かった。ただその、量が、ある年と無い年とあったけども。魚っていうのは、ほとんどあの、販売したからねえ。それで冬越しができればまあいいやっていうよな、そういう状態だったね。

春の鰯はね、塩辛にして、塩漬けしておいて。で、今っころ、この10月に入ると、どんどん売りにでたもんだ。あの、春のあの、大羽鰯は生で売ったけど。小さいのは、あの、生ではすぐ鮮度が落ちて、温ったかくなったらもう、売れないもの。だから、塩漬けにして、ほとんど生では売らなかったね、小さいのは。(売りに行くのは)ほとんど女たち。おれのおふくろか、そうそう、ほとんど一人だった。まああの、親父の妹が、ずうっとここに暮らしたったから、妹も多少は行ったけどね。ほとんどおふくろ、まあ、95%くらいおふくろだったな。ええ。

(売りに行った所は)この近郷、県内だね。うちのおふくろは、そうだなあ、どこまで行ったのか。大体に、この巻から漆山かけて、それからこっちの方は、西川町から升湯かけて、この辺まで行ったのかな。あるいは、湯東村あたりまで、あ、行ったな、確か。その辺です。で、こっちの方の、南の方は、結局、五ヶ(浜)とか浦浜とかまでの人たちが、やっぱりその、お得意を広げたものだからね、そっちの方はあんまり行かなかった。(麦、菜種は)いや、これはね、ここにあの、穀屋(こくや)が結構あったから、その人たちに、ま、あの、委託したみたいな形だね。その人が、ま、いったん買い取って、自分でその、他の大きな所へ出すっていうような。

(お米は)いや、売って歩かない。ここに穀屋があったもんだから、自分の食べるだけの量を確保して、余るなと思えば、そいつを結局、この地元の穀屋さんに売った。日中事変が始まってから、いわゆる総動員法が結局施行されてから、今度はもう、勝手に売るなんてわけにはいかないもんだから、昔のいわゆる農業会ってやつが一手に吸い上げていったわけ。安くとか高いとかっていうより、他へ売れねえから、結局そこへ出すほかしょうがない。まあ、強権みたいな形でね。今の農協の集荷場もやってるみたい。もっと深刻だったさ。いやおうなくそこへやらざるを得ないような。

<結婚>

結婚したのは、23年にしたんだけども。結婚した当時、もう既に、結局女房は、小さな

頃から行商やってたもんだから。あれ1年、2年くらい、でも、行商出ずに、農家手伝ってやってたかな。で、長男が、25年に出来て、長男が出来ると、また、行商の方がいいからって、行商の方に出るようになったんだわ。(奥さんは結婚以前からずっと毒消しをしていたのですか) そうです。その当時っていうより、それからもずうっと、その前もそうだし。

ほとんどの村内で、婚姻関係はあったからねえ。あんまり、部落から離れた所と交流が無かったしね。そりゃあ、物を売りに行って、買ってもらって、顔は知ってるんだろけれども、結婚っていう段階まではとても。だから、その、婚姻関係はほとんど村中でやられたったみたい。

<毒消しの行商>

(母親は行商には) うん、あのねえ、14、5年、昭和10年から出かけたんだけど、1年くらいは東京に行ったかも分からない。1年か2年はね。その後、ずっともう茨城。ほんとに、東京行ったのは1年か2年くらいまで。2年くらい行ったのかな。おれのおふくろはね(勝浦の方に)。勝浦に行ったのは、独身の時だもの。あの、おれのおふくろは出なかった。(百姓の仕事が忙しい) そうそう。まあ、余談だけれども、おふくろ、子供の頃、「こんなに苦勞しても、さっぱり金にならないんだがの。行商に行ってる方が、なんぼう楽だか分かんねえ。」って言ってほやいたのを覚える。だいたい、商い好きだったみたい。おふくろはね。

本人にとっては、えらいそのマイナスだったろうけど。いや、全くの余談だけれどね、自分でその、何年くらい、あの、房総の、房総も外房の方じゃなくして、勝浦は内房だからね。内房あの辺、勝浦から小湊の方ずっと回ってったみたいだけれども。やはりかなり、商いがあったんでしょねえ。

<供出>

で、あの、物を添えてその、供出、供出っていえばあれだ(けど)、出せっていう、その、この辺のカンズリからなんか、銅製品みたいなやつ、出せっていう時期があったのは16、7年か、そのへんだった。その頃ね、じゃ、おれも出そうかなとって、このくらいの50銭銀貨ね、50銭か20銭の銀貨、こんなあの、袋にいっぱいあったよ。「じゃ、おれ、これ出そうか」って言って、土倉から持ち出してね。「じゃ、これをやればいいさ」って、今考えるともったいねえこったなあと思って。戦後そう思った。帰ってきてから。何でああいうの出したかなあと思って。毒消し行ってたから、自分で取ってきて。あの、「こんなの出したってしょうがない」と思って、やっぱり、自分で蓄えて置いたんでしょねえ。

<家父長制>

(お小遣いは) 持ってた。そりゃ、誰もが持ってた。っていうのは、うちの生計費(せいけいひ)っていうのは、親父がほとんど生計を賄っていたもんだからね。(父親が財布を握っていた) そうそう。どこのうちでもそうだったよ。だもんだから。例えば10円だったら10円、30円だったら30円、与えた分だけは、それは出して、生計費に当てたんだろけど。自分の小遣い

というのは、かなり、かなりっていうより、ま、十分だかどうだかわかんないけども、持ってたことは持ってた。

(お母さんが魚を売って歩いて、売り上げは父親に出した) そうそう。出したよ。(母親はいくらか自分のお小遣いっていうのを差し引いて渡すことは) あまり、それはあの、引かなかったみたい。

毒消したのは、その、早い話が、腕のいい人と悪い人がいる。腕ったって結局、その、商売の上手な人と下手な人で、えらい差があるんだ。だからその、どのくらいの稼ぎをするかってのは、誰にも分からない。毒消しの場合は、分からないわけだよ。

ところが、魚みたいなやつはだいたい、自分で等分に、こう、10人だったら10人、20人だったら20人で、一つの仕事をするわけだから。20分の1ずつ、こう、お互い持って行くわけで、売りに。そうすと、どのくらいの金額になるかっていうのは、はっきり最初から分かっているわけだ。だから自分の小遣いとして、懐に入れるなんてことはほとんど無かったね。おれだけ高く売るなんてわけにいかないしね。だいたい、相場っていうのは決まってるんだから。

いや、親父(おやじ)がね、死んだのは、(昭和)29年だからね。だから結婚して4年、三男坊が28年に生まれて、その翌年だしな。(亡くなったのは)77だった。

(結婚以降毒消しの売上は父親に渡していたのか) おれの女房か。恐らく(父親に)出してたと思うよ。

(乗組みの賃金は) あるよ。そりゃあ、あの、賃金じゃなくして、ほとんど魚で販売したからね、現物で。それ(魚)をおふくろが売りに行くもんだから。こっちの方を回ってゆくより、親父の方行っの方がちげえから。直接親父の方に。親父が丈夫な時はね。晩年、死ぬまでやったよ。魚、魚はこっちで取るけども、金はそっち(父親)の方。(母親がお米とか畑のものを売った代金) それもルートは同じ。

<お小遣い>

おれの小遣い。ん、それは親父から「よこせ」って言って、親父からは小遣いがでたね。そう。必要なあれ(お小遣い)はね。で、親父が、そうだなあ、あれするまで、多少あの頃も、例えば米なんかは強権で、結局農協、農協って言うより農業会へ行っただもんだから、必要であればハンコ持ってって自分で(貯金を)下げてきたしね。

そう。あんまり、その、無駄な、どっかへ飲みに行くとか、例えばどっか遊びに行くとかっていうことも大体しなかったしね。しなかったもんだから、子供たちの学校の、まだ学校行かないから、保育園のその、あれとかっていうのは、親父の方から保育園へ納めたったしね。

(父親が家計を握っていた) そうそう、かっつきりね。酒はうちで飲んだし、煙草は吸わなかったしね、当時は。だからどうしても、小遣いは必要だと言えば、必要、ほんっとに必要になれば、だから、その、農業会、農協に行って持って来たし。それ以外はあまり、使わなかったから。

<姉妹の毒消し売り>

おれの妹はね、うちにいる頃、小遣いが無いからと言って、農閑期、すぐこの県内へ2回か3回ぐらい友だちと商売に出た。出たな。こりゃほんの、期間が短いからね。10日とか20日くらい。そいで、自分の小遣いがあれば、はいそれで打ち切ってさ、遠くへは、妹は出なかった。姉は出たけどね。姉は2人とも。すぐ上の姉は群馬、桐生を本拠にしてね。そっから、一番、長女、一番上の姉は、東京行ったな。(住んでいた所は) ええと、下谷だから、台東区。下谷竜泉寺におったんだわ。浅草のすぐ側ね。

(2人の姉さんの親方は) いや、あの、違うさ。違う人。あのね、うーんと、一番姉は、あれだなあ、あれ大分大きくなってからだから、自分で独立して、1人で行ったんだろうしね。すぐ上の姉は、親方っていうのは、小さい娘、若い頃は、おれのおばが同じ桐生へ行行ったもんだから、それと一緒にいったみたい。(行商に出るまでは) 田圃、畑やったりね。(弟は小学校を終わると) うん。あの、船に、あの、出稼ぎに出たね。

<不信心>

(旅立つ前にお参りに行くこと) それは、わたしが出来るようになってから、それにあんまりこだわらなかった。おれ自体は無精だから、不信心(ぶしんじん)だったから、あんまり(神社にお参りを)しなかったね。だから、お祭りでも、うちにいない年もあった。うちにおればね。そりゃ行くよ。あんまりとらわれなかった。(出かける前に仏壇に手を合わせることも) おれ不信心だから、あんまりそういうことなかったなあ。いや、お盆に帰(けえ)ってきたのは、それはあの、向こうの方もだいたい8月がお盆だしね。いや、向こうもお盆ってのを迎えるから、ずうっとやって、仏様ねえわけねえ、おれたちがいるんだから、あったんだから。やっぱりお盆に今日あったことぐらい報告したって罰あたらんと思って。

<初めての毒消し売り>

(それまで夫婦で一緒に行ったことは) 2回ばかりあるな。42年だかな、42年の年、(妻が)いわゆる病気やってねえ。で、4ヶ月ぐらい入院生活して、んでもう、荷物がしょえないっていう段階になったわけだ。そいで、まだ、その商い先に、例えば貸し、貸しもあっただろうし、商品もまだ残ったただろうし。で、44年だな、44年の年、その、荷物を整理してもいいからと言って、秋、あれ、もう11月に入ってからだったと思う。その「整理しに行こうや」って言って、今度電車では行けねえもんだから、車で出かけたんだよ、車で。そっから、あの、トラックでね、シートを掛けて、んで、ずっと貸してある所はお金貰って。おまけ、あの、1年ももう、病気のために休んだったもんだから、顔出さなかったわけだ。まあ、「どうした、どうしたんだ」って言われて。でまあ、一応そうしてある程度整理したんだけども。またそれでもやっぱり、残るのは残るわけだ。で、翌年、この45年の年ね、春、田植えが終わって。田植えが終わっちゃうと、まあお盆まで、なんか割合に、暇って言えばあれだけでも。どうしてもしなければならぬっていう仕事もなかったもんだから、また時期を見て、車で出かけた

んだわ。それで、お盆近くまでやって、帰ってきて。で、今度、お盆終わってから、おふくろがもうなにしろ84、5だったもんだから。とてもおばあさん置いて、おばあさん一人に子供を任せて行くわけにいがなくて、そういうことになって。じゃあ仕方ねえ、貸してある所、またあれだもの、集金だけしてもいいからってことで、その44年の年行って、全部おらあ帳面をもう、付けて来たもんだから。だから、どこに、なんて言う家に、どのくらい金、貸しがあるんだっていうのを、その時もう既に、ずーっと一回りしたもんだから、道は覚えてるし、顔は覚えてるし。じゃ、おれ、しょうがねえから行って来るわっつって。それが、一人で出かけるそのきっかけになったわけだ。

(奥様は毒消し以外にも) 売ってたよ。あのね、多少の衣類はやったし、金物はやったしね。金物あったって、農家を使う、ま、大体に家庭で使う金物くらいだけだね。あまり大きな物はやらなかったけども、そういう金物もやったし。

<掛け売り>

掛け売り? 今、現金売りが一番いいだろうけども、現金だけではなかなか、売り切れないので、掛け売りもやっぱりやった。みんなそうだよ。あの、戦前の毒消し屋っていうのは、掛け売りはしなかったんだけどね。戦後、30年以降ってのは、全部やっぱ、多少は掛け売りをした。そうじゃなければ、だって、売れねえもん。

その、買う人は、欲しいし、今使うもんだから。そう、どうしてもなくてはならないんだけど、金がないからっていうことで。じゃあ、この次でもいいやっていうような感じで置いてきたわけさ。また来るからってんで。

あの、最初の頃は、少しは(掛け売りが)あったね。少しはあったけれども、ほとんどもうねえ、おれが出るようになってからってのは、みんな、どこのうちでも、あの、別に、それが職業ではないけれども。いわゆるお弁当持って、その、お金を取りに出るっていうのは、もう茨城あたり、まあ、どこだってそうだったんだけど、それができたから。あんまりその、高額な物でない限りは、お金がねえってことはなかったもん。しばらくの間、そういう掛け売りも、そうだねえ、20年の内、前半7年くらいは、掛け売りってのは経験があるけどね。それ以後ってのは、みんな、どこの会社にいたとしても、とうちゃんが働きに行くとか、そういう形で。あれだもの、お金持ったったもん。だから、掛け売りってのはほとんど無かった。

<車で商い>

うーん、車、まあライトバン。あの頃ライトバンが無かったわけじゃないけども、ライトバン買う金がねえし。たまたまその、野山仕事するのにトラック使ったったからね。(買って)あったから、ただそれで行ったっていう。そっで、45年のトラック、いや、45年になったらね、トラックで、46年の年、あの、もうライトバンに引き替えてね。トラックでは、雨が降った時困るんですよ。いくらシート掛けてもね。どうしても雨入るしね。そんなら(車なら)電車賃もいらなし、うちから、だから車で往復したわけさ。

<家を作る>

(毒消しを売ったのは)茨城のね、茨城町が中心でした。だから、水戸のすぐ隣です。それから、茨城町を中心にして、一部、箱田町にも入ったしね。それから、水戸市の一部も入った。それから、隣、大洗との間にある常澄村(つねずみむら)っていう所も入ったしね。今、もう水戸市に合併したけども。

あのねえ、45年の年ね、春。その前は、2人行ってる時は、なんか3畳の間だったんだわ。1人だったもんだから、3畳の間で、間借りしておったんだけど。今度、おれ一緒に行くようになってから、どうもやっぱ窮屈で、どうしようもなんないわけだ。んで、どっかい場所があったら、家建てなきゃならないっていう、そういうやっぱり、段階になって。45年のあれ、春先行ったんだから、3月4月かな、4月だな、恐らく。たまたま、回って歩いたらね、お得意さん、その、お客さんの1人が、「ここへ作らっしょ、土地貸すから」って、そういう話があって。「じゃ、ここでいいから、ここならどっちにもいいから、じゃ、ここ勝手に建てるか」って言うんで。小さな家一軒、そこ(茨城町)へ作ったんだわ。それがね、45年の6月に出来上がって。そこでだから、女房と1ヶ月あまり暮らしたんだ、そこで。だから、家があるもんだから、1人でも行けたんさ。そんなきゃ、1人でとてもじゃないが、行く気にもならないし、行けないよ。

それで、泊まり歩くっていうのは、そういうことした経験がないから。よその家で寝たことねえもんだから、だいたいできないしね。自分の家なら、散らかそうが、何しようができるけれども、よその家ではそれができないもん。

あのね、1年、どのくらいその土地の、いわゆる借地料を出したらいいかって言ったら、「1年で1万円でもいいや」とか言って。1年で1万円。ずうっとだから、帰ってくるまで、1年1万円さ。もっとも、土地があれ、ものすごい荒れ地だったんだけどね。荒れ地だったんだけど、30坪くらいあったかな。30坪そこそこだったな。そこへ15坪の家を作ってね、それから、2mと4mの車庫を作ってね。

その頃ね、15坪の家を作って。お風呂から、まあ、洗濯機は、入れなかったけれども。電気、それから、ガス設備、お風呂、それから、ポンプ、あの、自家製。町にも水道は無かったからね。自家製でやったんだけど。そういう全部、一式、もう中入ったら、ご飯炊けば飯食えるようにして、150万だったわ。車庫入れないで。

<山林の売却>

(その150万円を調達した仕方は)ううん、それはね、150万てのは、どうしてもあの、必要だから譲ってくれてっていう土地があったんだよ(この村の中に)。その土地を放すと、150万だった。それ、そっくりそのまんま、そっちの方へ回してやったんさ。

あの、山林(を売ったん)だったんだけどね。山林といっても、すぐそのあの山林で。土建屋がその、どっかの埋め立てにするので、砂が必要だったんだよ。木そのものは関係ねえ

んだけれども、砂が必要で。その砂を取るのに欲しいって言われて。うーんとねえ、あれは、1反1畝だから、1100平米ぐらいか。結構、あの当時の値段としては良かったね。

<衣類の仕入先>

まあ、ずっと歩いてるうちに、おれ自体の新しいお得意さんていうのも、できたことはできたけどね。それはまあ数が、案外ほんの、数が少ないけども。ってのは、例えば、このうち来て、いろいろおしゃべりをしたり、なんかして。前のうちの奥さんが来たり、裏のうちの親父さんが来て。で、いろいろしゃべってるうちに、「ああ、越後の毒消し屋か」って言って。「そうだよ」って言って。「毒消し屋さん、ああいう金物持ってねえか」なんて言うから、「あるよ」って。そうすつと、もう、すぐ、それからが、今度、その次行けば、品物が良ければ、自分が使ってみて、使い良ければ、また来年も欲しくなるわけだ。鍋、釜は、やらなかった。刃物が多かった。農家用。衣類も多少は、やったね。

仕入れはね、最初は、2人で行ってると頃は、主にあの、東京の小伝馬町。ま、上野にも一軒、問屋さんがあったけどもね。小伝馬町へ、主に行った。だけど、それから、水戸にもあの、問屋団地ってものが出来たしね。今あすこへ、あの問屋団地の所へ、茨城県庁が、もう工事始まっているだろうなあ。農林省の、林業の育種団地があった所を茨城県が買い取って、「そこへ県庁を移すんだ」と言って、おれがやめる頃、もうその下準備やったんだから。今ころもうあれから2年だから、工事始まっていると思うよ。すぐその隣に、問屋団地ってのが出来たんだわ。そこ行けば、たいいて間に合ったからね。だから、東京なんて、ほとんど出なかった。おれも、2、3回は、特殊な品物については、東京まで出たことがあるけれどもね。3年くらい出たかな、東京まで。それ以後はもう出なかった。そこでだつて間に合うもの。

かあさんの場合は、問屋団地ってのは、ほとんど行かなかったんでねえのかな。あったことはあったんだろうけども。おれが行くようになるまでってのは、そんなに数が、問屋さんの数が少なかっただろうし。それから、東京へ行くよりもかえって、分からない所を歩いたりなんかしてるより、東京まで電車でいった方が早いっていう、早いって言えば、あれだろうけども、分かりやすいしね。

(刃物の)仕入れは三条だね。電話すればここへ届けてくれたもの。ほつで、旅先から電話すれば、送ってくれたしね。(支払い)は帰って来てから。あの、例えば、お盆と暮れとかつていうのを、ちゃんと時期になれば集金に来るし。あるいはまた、帰って来たよつていう連絡はするしね。

衣類は現金仕入れ。現地で仕入れる場合は、全部あの、その日その日の現金で、用のある物だけ仕入れるから。また明日も行けるしね。(行商したのは)おれ、去年、おとしの12月まで。だから、5年の12月までか、平成の。

<行商の間の畑仕事>

えー、私が出るようになってからは、例えば、田植えが、春、田植えまでの間に、少し行っ

て来ることもあったし。だから、3月頃も出て。田植えの準備するには、少なくとも、4月の始めに帰って来るとか、ほんの20日かそのへん行って、一回りして帰って来るとか。あるいは、田植え終わってからお盆までの間1ヶ月くらい行って来るとか。そういう、お盆終わってから今度、稲刈りまで行って来るとか。そういう繰り返しだった。だから、年に5回くらい往復したね。それから、田圃も畑も、ほとんどもう、人に作ってもらって。やらなくなってからってのは、だから、春行けば、ある程度1か月なり、あるいは40日なり、何か用があれば帰って来たけれども。そういう形で、あれしたんだけども。

おれが行くようになってから、草取りってのは、ほとんど薬で、取らなくても済んだもの。んで、あの、周りの、いわゆる畦草なんかは、あれだもの、よくよく生えれば、俵が、俵も子供たちがうちにいたから、鎌だけ用意しとけば。で、朝少し行ってやればできるから。そういう形で子供たちがやったみたい。

<鑑札>

あの、毒消しはねえ、巻のあれ、どういう、配置販売、配置販売制度が出来て、その、配置販売の従業員っていう形で。あの、保健所行って、あれして。あれだわ、許可を貰ってね。翌年、今度の12月31日までの期間は、やめたんだけども。あいつ（許可書）、もちろん、あるわ。まだ、持ってんだもん。（許可の期間は）いや、1年です。1月1日からね、12月31日まで、ああ、あそこにあるから見せるわ。これがそうです。

それで、8月にね、更新の手続きすれば、また来るんだけど、取れるんだけど。「もう出ることは恐らくねえから、もう更新しねえわ」って言って、更新しなかったんだわ。

（鑑札は）だから、昭和16年だか17年の年、物価統制令⁴⁾ってというのは、あの、この時だなあ。それで結局、これ（鑑札）が必要になって。昭和16年だな、確か。何か法律が変わってねえ、行商する人ら、その都道府県の県庁へ、その、届け出て、そこから県知事の許可が出た所へしか行けなかった。行けない、そういう法律があった。そいでその、申請するのでえらい騒ぎだった、この部落はね。おそらく、隣の部落もそうだったと思うけど、ちょうどその時、私はあの、昔の尋常高等科、高等小学校を卒業した。おれ15年に卒業して、翌年だったの。それで、その、「申請書類を作るから、お前も手伝いに来い」って言って、手伝いに行った覚えがある。何かね、あれ、何法っていったかな。何か法律が変わって、そういう事があった。確かあれが昭和16年だった。その後ずーっと、出る人たちは……。だから、いわゆる鑑札ってやつ、取らざるを得なかった。その前は、別に鑑札って無かったもん。自由主義で自由に売れたんさ。それからあの、確か物価統制令ってというのは思い出したけども、戦前の情性だよな。

ん、だから、こんどいわゆる医薬品だから、薬だから、その後のまた新しい法律によって、これが必要になったのかもわかんねえけども。最初にだから、これ、確かあの、45年の年、取りに、保健所に申請してね。講習、保健所まで講習に行つて。あれ、中郷（地区）か、講習

受けて。それで、簡単なあの、筆記試験やってね。じゃ、「お前は、やってもいい」っていう。あれで結局、じゃあ今度その、どこの従業員になるかっていう、いわゆる配置業者ってのはあるわけだから。そこの従業員になるよりは、角田にはもう配置業者は1人あって、「どっちでもいいんだよ」って言ったんだけど。その後、「あら、うちにもあったのに」っていう、言ったんだけど。はやこれ、貰ってからだったから、その後20年ずっとこれで。

(ある家の毒消しの) 製造権は、あの、無くなった。製造権は、吉田の、あれ、吉田のねえ、吉田薬品かな。ホシノっていう所へ全部、あれ、製造する権利を売ったのか、どうしたのかねえ、その点はあれじゃないけども。そこは、もう一手に製造してる。小林も、小林開益堂も、作ったんだよ、以前は。だから、製造権は恐らくそこへ行ったんだ、全部。ほとんど(の人は製造の) 権利売ったんでねえか。売ったか、いわゆる吸い込まれたか。その点はよくわかんねえけども。とにかく、製造権は無くなったんだわ。まあ、自分では作れないわけだ。

<許可書>

この証明書が無ければ、できなかった。っていうことは、もし、もぐりでやった場合、おれはそういう経験がないけれども、こいつ、茨城県のね、その、こういう物を調べる係りが保健所の中にあるんだってね、そういう人たちが「それを見せれ」って言った時、ねえなんてことになる、その、小林開益堂がいわゆるその、営業権を没収されるんだって。だから、いつもこいつはあの、「見せえ」っていう時見せなければならぬ、持ち歩かなきゃだめだっていうふうに、だから、いつも持ち歩いたもん、鞆の中へ入れて。

おっかあはね、この免許、こいつはあの頃はまだ無かったな。おっかあは、こいつねえもん。女房は。だから、これが出来たのは、45年からじゃねかなあ。まあ、他の人たち、これが、これもらってからあれだわ、長野の方へやっぱり、45年、46年、7年頃まで、7、8年頃まで、長野の方へ行ってる人があってね、「これ見せれ」って言って、見した。「見して下さい」って言われて、仕方なしにその、見したっていう人が、そういう話を聞いた。

どっかで行き会って言われたのかねえ。その点は、場所はどこだなんて聞きもしなかったけれども。わたしは1回も無かった。ほんの1回も無かった。

<楽天家>

あのねえ、おれ、その、神経質なところもないわけじゃねえけども、大体その、楽天家だから。行き当たりばったりだから、別にその、苦しいっていう、商売上の苦しいっていうのを、味わった経験がないね。ただ、まあ、一人で、手鍋下げてやってるもんだから、不自由な面は、確かに不自由だろうけども。そのかわり一人だから、楽天的で、なに、夜何時まで飲んでようとも、翌朝起きればいいやっていうような調子で。

晩酌なんかもう、晩酌っていうと、もっと恐らくもっと量が多いだろうね。おれ、清酒だけだからね。銘柄によってか、銘柄に、これがおいしいと思ったって、向こうに無いものはしょうがねえ、やっぱり。(お酒はむこうで買う) そうそう。いや、あのう、持って行ったことも

あるけども。だって、何か月も行く場合は、量があんまり多すぎて、車重くてしょうがないもの。だったら、ったら、あの、向こうで買ったもん、みんなおんなじだしね。そんな重い思いして持ってくより、向こうで買った方がいいやと思って。

<門口での口上>

(毒消しを買うのは)ほとんど、ほとんど奥様方。もう、そうだねえ、男性の人がねえ、お金を払うっていうことが、まず、まず無かったね。私の場合は、最初から、そうだねえ、うちの中にだれがいる時は、「こんにちは」くらいは声掛けたかな。それより、「こんにちは」とも言わずに、「毒消し屋」って言って、怒鳴って入って言ったのが多いな。「毒消し屋」って言えば、もう、おれだってもう、お客さん知ってるから。

玄関で商売するなんてことは、まず、おれの場合はほとんど無かったね。上がり込んでね、お茶飲んで、お茶、そうだなあ、早い時でも15分か20分くらいお茶飲んで、それから、「今日何だ」って言うから、「いつもの通り」って言って。「あの、もし急ぐようだったら、行って車の中、自分で見て来て」って言って。おれ、お茶飲んでるし。お客さんは車の中。

<お得意さんの数>

(お得意さんの家は)うん、そうだねえ、ほとんど農家だった。まあ、農家でない人は、何人もなかったなあ。うーんとねえ、女房と2人で行った頃は、数寄ったから、5～600はあっただろうね。おれ一人になってから、そうだなあ、ほんとに、今では年賀状出すと、大体100枚あると間に合うからね。100軒以上あったけども、年賀状まで出さなくても、たまにしか顔を合わせない人もあるから、やっぱり、その場合はあっただろうね。

(結局)うん、200ぐらいに淘汰してね。だから、のんびりしてる日なんか、1日に5軒ぐらいしか。朝出て夕方まで、5軒ぐらいしか寄らねえで帰って来ることは、度々あった。

<昼食>

自分でお弁当を作って持って行く。で、「わざわざ男でお弁当作らなくたって、うち来ればいつでもご飯くらい、茶碗くらいあるのに」って、どこ行っても言われた。けども、必ずしも、忙しい時なんかさあ、その、お昼ちょうど昼飯(チュウハン)時期に行こうと思ったって行けない場合だってあるから。それで、行ったって、たまたま留守だってあるわけだし、そうずっと、車の中でもどこでも、お弁当持ってる場合、どこでも食えるし。

お弁当作ってもねえ、玄関先に忘れて、持たねえ時がある。そうずっと、車で10分も15分も走らなければ、ラーメン屋とか、ご飯食べさせる所がねえ場所だってあるわけだし。そういう場合、仕方なし。「行ってご飯食べて来る」つつって、車でフウって行って。「うちにご飯ある」って言って。いや、まさか、「そこすぐそこへ行けば、ご飯くらい食えるから、行って食べて来る」つつって。かなりあるなあ、20年の内。(商いが)終わり、帰って来てから、今度はその、冷たく、冬なんか冷たくなった夕飯もう、しょうがない、夕飯の分はちゃんと残しとくから。そういう、だって、用がねえからやっぱり、大家さんの犬にやったりさあ、なんかし

たこともいっぱいある。

<料理作り>

(料理することに)ほとんど抵抗、無かったね。料理、ここ(角田の家)におった時か。それはねえ、子供たちが小さい頃、おふくろがほとんどやってくれたから、そら、ご飯炊きくらいはできたよ。

いやあ、おかずもねえ、魚料理はおふくろよりおれの方が早いから。(漁師だったから)そうそう。魚いじるのは得意だから。だって、今だってそうだもん。魚料理なんて、魚なんてあれだもの。おっかあ、女房は触ったことねえもの。ほとんどおればっかりだ。肉の煮るのにも焼くのにもね。ましてや、刺身なんか、なおさらだ。

(刺身にするのは)いや、だからね、やりつける、いつもやっていたらね、大きいなら大きくなり、小さいのは小さいなりに。いや、まあ、億劫だって言えば億劫。そういうもんだと思えば別に。

昔は家でも魚をつくる時は台所に立った。あとは、野菜もんなんかは女がやった。いまでも、魚料理は私の仕事だ。たいてい魚は男ばかりがいじったからね。船の上でね、腕を振ってきただけというのは、ここからでる船というのは、漁師自体が小さな漁師で、5、6人、10人くらいが協同で1艘の船を持ってね、ボンボン焼き玉エンジン付けたやつで、流し刺し網、大羽鰯のね、その漁はいま頃出てって、あしたの朝帰ってくるんだから。夜船の上で、夜食に食べたんだか、帰ってきてから網を全部船のなかに積んで、捕れた鰯を煮て食ったんだな、船の上で。ごはんは夕飯とあしたの朝の、栓でこしらえたワツパのツゲと言って大きな楕円形のね、米を一升炊いたのが全部入るくらいなの。それは必ず残るんだけど、船というのはいつ何時何があるかわからないから、御飯だけは、3食や4食は常に沖に出る時は用意しといたもんです。

(角田には番屋があって番屋汁をつくったのでしょうか)このすぐ下に、番屋かなんかがあったみたいです。その漁師の乗組員だけが使うんです。番屋を建てて漁師をするというのはひとつしかなかった。ここの部落の人は2~3人は乗っていたけど、ほとんどよそから来た人、いわゆる出稼ぎに来ている人が乗っていたんですよ。

<味噌作り>

(宿では)別に、不自由だっていう感じはなかったね。米と味噌だけは十分、例えば2ヶ月だったら2ヶ月の間でも、これだけ持っていけば十分間に合うっていうだけ、やつを車に積んで行くからね。米と味噌はね。だから、味噌と米だけは、茨城の味噌・米は、まず1食も食わずにいたね。(味噌は)今でも作ってるよ。今でも作ってる。いや、あの、豆は中国産だかアメリカ産だか知らないけども、豆は買う。豆と麹は、塩と買うけども、作るのは自分で作る。

味が、まず味が違う。で、あの、例えば、味噌つゆなんか、1回煮たやつが余るでしょ、そうすると、あつためて食べるでしょ。買った味噌は、どうしてもあの、2回目になると、ゴタゴタしてね。味も悪いし、ゴタゴタして。あのゴタゴタがどうも、おれには、やっぱり馴染ま

ないんだわ。煮えばなだったらいいけども。2回目になったらゴタゴタして、で、自分のうちで作った味噌は、何回あっためかえしても、あの、ゴタゴタっていうのがねえもん。さらっとしておなじだもん。

漬け物は持って行かない。漬け物は、どこで、例えば、買って食べても、あんまり変わりないしね。(鰯のナマグサヅケは)塩漬けの鰯なんか、うん、ま、持って行けば食べたんだろうけどね。あまり持って行かなかった。

<野菜を貰う>

んで、野菜物なんかは、回って歩けば、その時々野菜も、出来た場合、農家のもんだから、時期になったらもう、「あれ持ってけ、これ持ってけ」って。おら一人だから、食べ切れないから、「こんつぎもらう」って言って。それでもなにほどもらって。あの、大家さんに出したか、またあるいは、作ってない人らち、もう帰りに、「お前んとこにこれ置いてくわ」って言って。

いまっころ(冬場)だったら、もう白菜がどんどん出来てるから。あんなの、こんなのが1個、1個もらってきたらもう2日も食えるのにさあ。こんな大きなやつをおまえ、5個も7個も段ボールに入れて。「これ持ってけ」って言ったって、おら、1人。いや、「食べ切れなかったら、新潟へ送ってやれ」って言うの。新潟まで送る必要もないからと、帰りにみんなねえ、作ってない人のうち、こう回って、わざわざ回ってこう、配って来た。

<東京の宿>

(今でも毒消しを持ってきてくれるって言う家は)送ってくれていう? うーんっとねえ、そうだなあ、年間毒消しどのくらい出したかなあ。やっぱり、100。こういう割合大きな袋なんだけども、100個くらい出したかなあ。(毒消し赤玉などは一緒に)いや、入ってない。毒消しは毒消しだけ、金証丸は金証丸だけ、赤玉は赤玉だけ(別々になっていた)。

毒消し以外はねえ、その、頼まれた時電話して送ってもらうの。あんまり数が出なかったから。やっぱり毒消しが1番多かったね。だって、毒消しはこしかなないもん。(足りなくなった時には)電話。急ぐ場合はね。急ぐ場合はそうして送ってもらった。ここのね、小林開益堂の、あれは三男坊かな、東京の、あれは入谷にねえ、所帯持ってる男がいたんだわ。そこはいつもその、毒消し、そこに電話すれば、あるもんだから、そこから送ってもらった。

(その場所は)入谷だった、あすこ。竜泉寺じゃない。入谷だな。竜泉寺はあれ、下谷だし。竜泉寺の近く、すぐ近くだったけどね。

うん、あの、竜泉寺、入谷、それから浅草ね。長屋は多かった。うん、多かったかの。うん、すごく多かった。だからあの、久里浜の通信学校に、海軍の時期にね、日曜日にあれだもの、竜泉寺まで遊びに来たことがある。日曜日、外出になるから。電車に乗って、来たことあったよ。

遊ぶ所っていうのは、あの浅草あたりは結構、ああいう映画とか、芝居とか、ああいうのはあの当時あったからね。わしらなんか、だってもう、時間がないから。あの、帰る時間、それ

こそ時間切ったら大変だから、そんな映画見たり、芝居見たりなんかしてなかったけども。たまたまあの当時まだ、姉がその、竜泉寺におったからね。うん、宿あったし。それから、角田の人で、同じ人である、この部落の人で、大工の棟梁さんがおったから。そこへ行ったりね。(角田の若い人が弟子として) いたいた。今ほとんど、そういう人たちは一人もいなくなったもんね。ましてや、去年、一昨年まで出た人は、たった1人最後まで残ったのはおれだった。

<分家>

おれの弟は、北海道の紋別にいる。漁師して。親父の妹の家に養子に入ったんだね。女房はこっちから。こっちの人と結婚して、それで、向こうへ行って、向こうで暮らしてる。もう、恐らく、帰っては来ねえだろうな。(村に住んでいる三男の) 土地は、あのね、うちの土地がすぐその妙光寺のちょっと手前に、あそこに1反分、400平米くらいあったんだわ。その土地、だから、そこへうちを作って、「自分たちでうち、うちくらい自分で作れ」って言って。で、まだ親父はとでもその、登記変更は、「今生きているうちにやるとえらい税金がかかるから、おれ死んだら、登記、遺産相続っていう形で登記直せ」って言って。生きてるうちにやったら、おまえ、えらいかかる。

(分家のさいに部落に挨拶に行くことは) そんなことはあんまり聞いてないですね。ただ、ま、分家してそこへうち建った場合、まず第一にその、うち建てる場合はね、そこへうち建てるんだっていう、こここの、誰々の、三男坊とか次男が分家するんだっていうことは、はいもう、こっちから言わなくなつてみんな誰もが分かったもん。

<村の無償労働>

それと、わたしはまだそうだねえ、小学校へ出る頃までは、出て、3年生か4年生、5年生ぐらいなるまではねえ、その、壁塗る土をすぐ前の山から、村中の人を籠にしょって下りたもんだから、2回ずつねえ、その、前の山から籠でしょって。で、屋敷のどこへ置いてくれたもんだ。山の土を。そいつを結局練って、壁に塗ったわけさ。必ず、そう、無償労働だ。そう。手伝いだ。それは、ここに住んでる人たちは、どんな人でも必ず出たもんだ。出なかったら、それこそ村八分になっちゃう。ま、特殊なね、事故・災難に、病気とか、誰もが認める、認められる人でなければ、必ず出たものだ。ま、その頃は、一人暮らしなんてのは、無かったからねえ。あと、親戚は、今度、この敷台(ぶだい)、地幅(じふく)やるために、いわゆるみんな、人間が、こう、土を固めたもんだからね。(これは) 親戚がやった。

<ユイ>

ユイは必ずしも親戚だけっていうことでなかったね。懇意の人たちは、例えばうちと前が、お前んとこ、いつ稲刈りするって言ってユイしたり、なんか、それはあった。親戚だけじゃなかった。(田圃の近い人同士がユイをすることは) 敢えてそういう決まりは無かったみたいだね。(家の近所の人とユイをした) そうそう。あるいは、おれの友だち、懇意の友だちが、「お前んとこユイしようか」って言って、「いや、お前いっかに植えればいいし、おれいっかに植

える」って言って。

(同じ年の人どうしでユイすることは) うーん、そういう、特別そういうなんか、あれは、無かったみたいだね。大体、宿をして、こう、あれしたってのは、かなりもう年取ってからだから。12、3(歳)くらいになってからだから。男の人と女の人ってのは、宿が同じでなかったもん。別々だった。女の人は女の人だけで、例えばこのうちにすれば、男の人たちはまた別な宿取って。

うん。どこどこヨリっていう、そういう名前なんだ。(ヨリは) もう、戦後あんまりそういうのは無くなったね。今では全く無い。ただし、この、おれの場合は、子供の頃からのそういうのを味わって知ってるから、やっぱり、そういう人たちとの交流はあるけどね。

(一緒に旅に出ることは) うんうん、そういうのは、60くらいまでは毎年やったけどね。60歳、本家帰りをやってからは無くなった。うちの、おれの場合はね。

<子供を大学に出す>

やっぱり、良かったんでねえかなあ。っていうのは、僕の場合は自分のいわゆる小遣いとしても残さなかったからあれだけど。むっこう(妻)は今でも自由に買い物するくらい小遣い貯め込んでおいたから、やっぱり良かったんでねえかなあ。うちにいたんじゃ、とてもじゃないが、そういうことはないだろうしね。

大学出すためだったって、おれの場合は、子供たち大学出すにはあれだもの、ほとんどあれだなあ、その、働いた金で出すなんてわけにはいかなかったもんだから。いわば親父から譲られた土地を離しながら、学校へ出したもん。自分で間に合う時はあれだけでも、ただ無い時は、土地離し離し。おれの場合は山林だったね。こっちの。かなり数がいっぱいあったから。その、一カ所じゃなくして、あっちにもあり、こっちにもあったから。ま、今でも7、8カ所まだ残ってるけどね。

<自給生活>

おれのうちの畑は大体に1町分までは無かったけれども、8反いくらかあったね。(作るものは) いや、それはもう、別にあの、誰が決める決めないに関わらず、去年ここ菜種作るから、今年は麦とか。同じ物を同じ所に作るっていう連作はしなかった。だから、去年はあすこは麦作ったんだから、今年菜種作るっていう。小さい頃はほとんどそうだったね。冬作はね。

(春から夏は) うん、あの、結局、中へまたいわゆるスイカを作ったり。全部が全部、スイカなんかほんの一部しか作らななかったけどね。また、夏は夏でその、麦の間へ何かしらん植え付けるっていうよな。畑を遊ばしとくなんてことは無かったね。

販売用の菜っ葉類って、菜類っていうのはあまり作らなかった。その当時はだから、まあ、戦後も同じだけでも、あの、大豆やなんか輸入、どんどんどんどん輸入する品物、輸入する以前はあれだもの、味噌用の大豆とかそういうのを全部自分で作って、そいつを落として豆にして、結局それで味噌を作った。うん、それはもう、いつこの味噌作りが始まったのか分かん

い、分かんない。味噌どころか、戦後なんか醤油まで作ったもん。

(塩は) 作ったよ。あの食糧難の時なんか、ここで塩を炊いてさ。その塩を持って女たちは行って。その、塩炊きは農家でなくなっちゃって誰もがやったからね。それでもって、米と交換して来て、その米を食べたった。

あれ、塩がね、塩を作っちゃだめだって言われたのが何年頃だったかなあ、かなり、30年頃まで塩を作ったんじゃないかなあ。かなり遅くまで作ったんだよ。

<疎開者>

(疎開で親戚の人は来ましたか) 来たよ。本郷の、あれだわ、17年の年だかな、来年とやかく、来春、軍隊呼んだって行って、17年の何月頃だったか、東京遊びに行ったんだけど。その頃本郷のね、赤門の前にいたったおれのおばが、あれだわ、まだ今でも丈夫にいるけども。それが疎開で、東京の人と結婚してね。えーとねえ、最初はだからうち来たわけだ。それからすぐあの、親戚、うちの分家がそっちの方にあった、その分家の物置を改造してそこでずうっと暮らしておったんだけども。20何年頃かな、親父29年に亡くなるから、28年頃かな。自分で今度、この部落の共有地の一部を借りてそこへうち作って。(その分家の家の) 屋号はね、分家分家って、うちは分家って言ったし。一般的な屋号は、キュウエン分家っていう名前だった。ここがキュウエンだから、キュウエン分家って。キュウエン分家、なんか3軒ぐらい、ま、今でもあるにはそうだけでも、3軒ぐらいあって、キュウエン分家、あ、いや、その先代がね、ジロキチ。疎開して来たっていうの、うち、おれの身内関係ではそれだけだな。

(疎開者の) お仕事ってのは、おれのおばは、ほれもちろん行商に行ったしね。その相手は、そうねえ、適当な手間取りがあればちっとは手間取りなんか出て、生計のために、足しにしたんだらうけども。うちの、おれのうちの仕事を、主に手伝ったみたいたな。なにしろ、都会人だから、農家の仕事なんていうのは、あんまり不得手であれだったんだらうけども。やっぱ自分なりに精一杯やったんじゃないかねえかな。漁業は手伝いしなかったな。

<親方はいない>

(親方弟子関係について) おれが出るようになってから、親方と弟子ってのはもう、ほとんど大体に、こっから出る人なんてのは、その、ほんの10人あったかねえくらいだから、もうざーっと激減してからだから。もう、ほとんどやめてからだもん。特殊な人ら、特殊って言えばあれだけど、ほんとに根強い人だけが残ったぐらいで。ほとんどもう、やめてからだから。だから、弟子に付く人はもちろん、若い人たちなんてのは、弟子に行くより自分の仕事を見つけて、自分の仕事へどんどんどんどんやってからだから。なにもわざわざ弟子になって、毒消し屋に行かなくなっちゃって、自分の仕事はいつからでも見つかる時期だし。働く場所はいつからでも出来てからだから、そういうことは無かったです。たっただおれだけは、弟子に付かなくなっちゃって、すぐ親方になったから。(売り方は) いやあのう、聞かなくなっちゃって、やってるの見てれば。別にその、言われなくなっちゃって見てれば分かったしね。(妻と一緒に歩いて覚えた) そうそう。その前はね、

その、商いっていう、いわゆる品物を人様に渡して、それからお金をもらうっていうのは、葉っぱ1枚だってやったこと無かった。まあ、魚1匹だって自分で売ったっていう、売ってお金をもらったっていうことは無かった。全部女の仕事。それはもう。

<一人で行商に出る>

抵抗感ねえなんてもんじゃないですよ。だから、お盆あたり9月、10月の稲刈り、もう、田圃仕事が全部終わってからだからね。その頃まだ自分で稲を作って、農家もやったから。恐らく、11月へ入ってからだと思うんだ。いまころ、まだうちにいたと思うんだ。でさあ、今度あれ、「おふくろが年だし、一人で行ったら」っておっかあに言われて。「うん」って返事はしたものの、とてもじゃないが足が重くてね。最初に出かけた時。それで、「巻まで行って帰ろうか、こっから帰ろうかな」っていう。それからその先、今度、17号線、三条へ出て、「こっからうちへけえ（帰）ろうかな」って。ずうっと、長岡行って、んで湯沢行ってね、「ここ峠越えたらもうけえねえんだが、こっからうちへけえろうかな」って、とうとう茨城のね、自分のうちに着くまでこっから帰ろうか、こっから帰ろうかって。抵抗は無かったなんてもんじゃないよ。仕方なし出て来たんだから。

そのうちに車、一人で走るし、道路は分かるし、知ってるし。向こうへ着いてまあ、明日は寝ていてもいいやと思ってさ。んで、まあ、夕飯食べて晩酌、グロッキーになるくらいまで晩酌飲んで。それでねえ、翌日（よくひ）、すぐおれ、出たと思うんだ。っていうのは、ほら、今まで掛け売りして、いわゆる貸しがあった所へ集金するつもりで行ったわけだから。他の所回るより、まず、いわゆる掛けのある所へ先、一番先、回る必要があるわけだ。集金終わったらけえるつもりでいたんだから。んで、掛けの、その、貸してるお客さんのとこ行ったら、あれだ、その、貸した金は、置いた金は、その、もちろん払ってもらったし。その、新しいねえ、品物の注文を受けたわけさ。たまたまその品物は、車に在庫が無い品物だった。それで、どうしても翌日、問屋さんへその、仕入れに行かなきゃならないはめになった。だけどその、知らない問屋さんじゃねえから、そこへ行けば、金さえ持っていけば、いくらでも売ってくれるわけだしね。いやあ、それで、その翌日行って、金もらってその金でねえ、仕入れに行ってその、仕入れ、頼まれた品物を仕入れて。そいで、仕入れて、その、問さんがちけえから、その足で結局届けに行った。生まれて初めてその、品物を渡してお金をもらったあの時、はあーっ、商売っていうのはこういうもんかなあと思って。今でも決して忘れやしない。すごくほんっとに、生まれて初めて品物を渡してお金もらったっていう。忘れやしないなあ。やっぱ一種の感激だったわ。感激だった。初めて、いわゆる品物渡してお金もらったっていうのは。

それ、例えば1,000円の品物を20%くらい手数料もらって、1,200円に。これはもうはや、商売の普通の、常套だからね。その20%で、おれはやっぱ生活しなきゃならんわけだから。20年間商売やって、暴利だけはやらずに来た。もうどんな品物でも大体に30%から、時には40%くらいでとまる商品もあるけどね、だけど1,000円の物を2,000円に売るなんてい

うことは、最後までしなかった。自分の、ここで飲んで、掛かりを掛けたあの、経費を払って、それでうちへける時裸だって、なにかまやしないと思って。うちへ帰るだけの物があればいいやって。

おれ行って「あのう、女房は」って言うから、「おっかあは」って言うから。こういうわけでもう来れなくなったんだって言ったら、「いやあ残念だ、残念だ」って言われたけど。顔出せば黙って向こうの方から、「あの、おれまだ借りがあったんだから払うよ」って言って。こっちから「くれる」、「あの、頂きたい」って言わなくなつて、向こうでちゃんと自分で知ってるから。きれいに払ってくれた。それこそ、1円も残さずに払ってくれた。だから、顔出したら、全部あの、向こうの方で覚えてるから、払ってくれた。

(それで) いや、今度車だから、背中より荷物は量をいっぱい積まれるわけだ。どうしてもまた、あの、いわゆる掛けが出来るわけだよ。(未収金を回収しただけではなかった) 一番最初からね。最初から。回収するつもりで行ったんだけど、行けばやっぱり荷物あるし。あの、商売だから、「あれが欲しい、これが欲しい」っていう注文だってあるわけだ。そうすつと、仕入れざるを得ないわけ。仕入れて持ってって、金になれば、ま、くれればいいけど、「今ちょっと都合悪いからこんつき回って来るまで」って言えば、「あ、そうか」って置いて来るわけだ。知らないわけじゃないから。(売る物を最初から持って行った) そうそう。在庫もあったしね。向こうに。もううちがあるから、うちがあるっていうそこに、間借りだったんだけど。廊下へずうーっと品物、積んだつたから。在庫はまだかなりあったもん。車だから今度、背中と違ってごそつと積めるわけだよ。

今度、一人で行った場合は、今度これ、新しいうち、自分のうちだから、品物、在庫なんかどこでどう積んどこうと勝手だから、一間あれば2人で暮らせるんだから、まあ二間あったつた。だから、一間はほとんど品物置き場にしてくれ。

(家の完成は) お盆前にね。で、6月のねえ、確かうちが出来たのは6月の17日だと思うんだけど。それから20日過ぎあたりに、その、いわゆる近所の人とか、あれを、披露目をしたから、1ヶ月ばかり、そこでだから暮らしていたわけだ。

やっぱり、時期的にね、こっちの方、例えば、農業やって、漁業もまだやったつたな。だから、漁業終わってから、ほとんど、いまっころになればもう地引き網なんかだめだから、地引き網が切り上げてから手伝いに行つたつたわけだから、まさかやるとは思わなかつた。思わなかつたんだけど、今度自分で向こうに貸しを置いてきたもんだから、やっぱり仕方なし回収しなきゃならんし。今年また回収がてらに行けば、また新しい、結局、発注があるわけだ。その惰性で、結局、20年間。そんなもんですよ。いや、その決意、なかなか「1人でやるんだ」なんていう、そんなこと、夢にも思わなかつた。

<正月とお盆>

(冬場もむこうに) いた。1月は行かなかつた。おれは大体に、暮れ、お正月はいつもここで

(角田の家で)、お正月、お盆はここでやったからね。そういう時期はかなり、あれどのくらいまでそういうの続いたかなあ。うーんとねえ、戦後のそういう時期が続いたから。とにかく、戦中、戦前はその、必ずそうだった。4月のねえ、お祭りが4月4日、春のお祭りやると、だいたいでかけるのが10日ごろだった。それから帰ってくるのがねえ、9月いっぱい。10月の、こっちが10月4日がお祭りだから、お祭りに間に合うように帰ってきたもんだ。だから、(毒消し売りの人は)お盆は当然いなかった。

それもあつたし、お盆とお正月だもの、家内中(かないじゅう)が顔を会わせなきゃおかしいっていう。いや、おれはそういうつもりで、お盆は、お正月は、必ずここでやった。だから、寒い頃には雪が積もるから、雪があるから。そうだなあ、おれの場合は3月へ、へえってからだな。早くて3月。2月の月に1回くらいあつたかな。2月の月に行ったってのは。1月は大体出なかった。

で、荷物なんかみんな置いてくればいいんだから。で、8月、この秋行く時、こっちらああの、スノーとかあるいはスパイクとか、タイヤをもう積んでったから。向こうで履き替えて、で、返して。

<託児所>

(託児所は)あつたよ。託児所というのはあつたよ。幼稚園と言わずに託児所と(言った)。

(託児所は)多少は金かかったよ、ほんのごくわずかだったんだけど。子供好きのおばあさんが、まああの頃、おばあさんと言ったってそんなに年は取ってなかったんだけど。そういう、家にその、二親いない人たち、男ばかりで結局、かあちゃんたちがみんな出稼ぎに行ってるから、自分で野良仕事に行けば、子供らだけ置くのは大変だっていうわけで。それで、なんかね、必然的にこう、託児所を必要だっていうふうになっていって。託児所が開設っていうより、「じゃあ、おれが預かる」って言って。最初民家のうちだったけどね、ずうっとそういうのが続いたわ。それが、それは確かねえ、昭和3年か4年の頃から⁵⁾。だから、おれの同じ年の人が託児所へ行った人はいるよ。むしろおれより、おらあ1級先輩の人も託児所へ行った経験持ってるよ。そういうの覚えてる。うちはほれ、両親ともうちにいたったから。敢えてそこまでは行かなかったけどね。

<昭和恐慌>

(昭和の初期の頃は)あの、ものすごい不景気でね。いや、結局その、金になる、ならないというより、結構魚も取れたからね。だから、安いとか高いとかっていうより、持ってけば売れたわけさ。また、他に肉なんかないわけだから、やっぱり魚持ってけば、魚の取れないとこへ持ってけば、売れただろうし。また、売ってきただろうし。だから、たいした金でなくとも、やっぱ現金は多少持っていけば、取れた、現金を持ち帰ったと思うよ。やっぱ親父たちは、お金取りに目が無かったから。こと金に関してはやっぱり厳しかったもんね。小遣いなんてのは本当に、お盆かお正月かお祭りに小遣いもらった、小さい頃なんて3銭か5銭だもんね。

<結婚式>

(嫁に行く時毒消し売りで貯めたお金を持たせることは) 現金渡したかどうかは、おれは分からないな。ただ、ほら、嫁入り道具は結局、買ってやったみたいよ。多かれ少なかれね。この部落にはあの、結納金制度ってのは無かったからね。結納金ってのは無かったから、だから嫁入りの道具、いわゆる、ってのは全部親が出してやったもん。(婿は結納金を) 全く持ってこない。(娘がいると) 大変だったさ。だから、「女の子3人いると身上つぶれる」って言ったんだよ。そういう言葉があるんだわ。

(結婚の挨拶には) 仲人がね、その挨拶はね、ほとんど仲人がやってくれたの。(その時) 婿は行かない。それで、結婚式の費用は、結納金やらないから、結婚式の費用は全部男持ち。今、だいたい結納金、まあ、この辺だって結納金は多かれ少なかれ出すだろうし。それから結婚式は、頭数によってちゃんとそれだけのものは包むだろうしさ。で、親は、うちの方は例えば10人だから10人分って言って置いてくるだろうしね。昔はそういうことなかった。で、式場で結婚式なんて、だいたい挙げなかったしね。たいていうちでばっかりやったから。襖も外すしねえ、そっちの寝床もあの、全部開放してね。ただ、こっちの、今度嫁さんが、なんか道具運んで来るでしょう。その部屋だけは戸を締めておくけども、あと全部開けてね。そうしなきゃだって、ちょっと親戚が多ければ並びきれねえもの。

(嫁入りの行列を) 邪魔する人ね。邪魔はしなかったけども、あの、みんなあれだわ、表にね出てね、以前はなんか雪の降る頃結婚式やったもんだから、雪を丸めて、本気ではないけども、結局嫁さんにおっかけてたっていう、そういうことも聞いてある。ま、それ、一種の邪魔かねえ。それ、あの、悪気でやるわけじゃなけれど。お祝いのために。雪をかけたっていう、そういう話し聞いたことがある。

ツレオンナってほんとにあの、嫁さんとおんなじ支度をしてね。ありゃ特殊だろうねえ。どっちが嫁だかわけ分かんねえ。婿さんにはツレオトコってのがちゃんというから。まったく親しい友人。

<お産>

お産する。そうだね、ほとんど助産婦さんが来てね。うちの子供たちはうちでお産した。うちって言ったって、結局、嫁さんは自分の実家へ帰って、実家でお産したからねえ。おれの場合は倅の上に女の子が一人あって、あれ2時間ぐらいで死んだんだけどねえ。あれは難産のために、3日も助産婦さんが来たんだけれど。どーうにもならずねえ、病院、お医者さんへ、産婦人科へ連れてって。それと、ええっと、長男は、ああ長男はあっちでできたな。次男もそうだったかな。あと今、3人の子供は全部うちで、助産婦さんが取り上げてくれたのかな。けど、ここでお産しないから。自分の実家へ行ってお産したから。

<行商の体験>

最初から抵抗なくして結局、入って行けたわけだ。全然知らない所だったら、だから、さっ

き言った通り、菜っ葉ひとつば売った覚えのねえ人間だから、とても、商売商いするなんていうことは、出来る道理ねえさ。

恐らくそうだね。そうです。そこで結局、やあ、とにかく嬉しかったよ、あの、お金もらって。品物渡してお金もらったっていうのは。それで、また、在庫あった物をそれが欲しいからといって、渡せばお金くれるでしょう。その積み重ねだった。

(感動的だった) そうそう。だから、こっちで、その、商売をしたんじゃなくて、お客さんにさしてもらったんさ。そんなもんだ。言い換えれば、確かにそうだ。(今まで経験がない) そう。全然ないわけだから。向こうから商売教えてもらったぐらいのもんだ。そうそう、本当に、一人一人の人間と相対しなければ仕事は成り立たんわけだから。そうです。

<行商をやめる>

ええーとね、一昨年のね、年いっぱいでおれやめるんだから、3月、3月の1日に(お得意さんの) 結婚式やった。一昨年の。その前に12月帰ってくる時、恐らくこの、おれの俵に、「親父もう年だし事故などやられたらでは大変だから、事故とそいから旅先で具合なんて悪くなれると、こっちから迎えに行くなんていったら大騒ぎになる、だからもう、いいかげんに切り上げた方がいい」って俵に言われたから。ああそうだなって言って。「でも、まだいわゆるいさかきがあるから」って言って、「じゃ来年いっぱいやめる」って言って。て言って、前の年言っているもんだからね。で、お客さんにも、いわゆる、恐らく「俵に言われたから来年でおれ、商売切り上げるつもりだ」って言ったら。「なんで、まだ大丈夫だ、大丈夫だ」って言われたんだけど。そういう、前の年に言われたもんだから、大家さんでも、それだけ置いていくか、あの、「やれると思うんだ」って言って努力するから。そう、息子、ジュンイチってんだけど、ジュンイチ、お前も一生懸命になってくれるかって。

で、帰ってくる時に、あれだわ、「そのうちは、壊して持ってけ」って大家さんに言われてもしょうがないから。大家さんに、「適当に使ってくれよ」って言って、くれてきたんだわ。今まで長くお世話になったから、こんなのを壊せったって、壊すにはお金かかるし。「もうお宅、いいように使って下さい」って言って。そのまま。その、鍋から釜からさあ、お風呂から。あの、什器類一式そこに置いて。おれ、茶碗1個も持ってこなかった。茶碗なんかねえ、あれだよ、茶碗とか皿とかそういう物は、うち建てて、いわゆる部落の中の懇意の人たち、それからお得意さんの懇意の人たちをねえ、20人ぐらい招待して。ま、「ここに住むようになったからお願いします」ってって、招待したその、皿なんか、全部用意したんだわ。20人以上ね。

<日記をつける>

家に帰ってきて、一人でしよう。思ったことをなぐり書きしといたもんです。「きょうの忍耐は忘れるな。時間は考え方によっていくらでも消費できる。その技術を見つけることを真剣に取り組むこと。人知れず己の体の傷みをば、そとに知らせず、身のさびと知る。がまんすればできる。夜食の気分よさ。これを続けよう、もう遅いかも、忘れないけど。」(ある日の日

記から抜粋) 1日売り上げたやつをね、書き留めといたんだよね。(衣料関係が多いですね)私が行ってからは衣料関係が多かったからね。ほとんど毒消し以外のことのほうが多いかな。

あのね、おそらく、これを書いた時は、どっかで男の人だったけれども蔑まれたことがあったんです。よっぽど開きなおろうと思ったんだけども。ここで、つまり、それもおれの懇意のお客さんでない、誰かそこへ来て、そういうことを言ったんだな。それに対してあえて反駁しないでこらえて帰ってきたのをおそらく書いたんでねえのかな。いま言われれば、そういうことがあったんだよ。そこから、こういうものをとどめよう、書き残そうという、その時から始まったと思う。「食べられなくて行商に来ているんだろう」というようなことを面と向かって言われたからね。

あのねえ、これは私としては大きな経験であり、発見であったと思うんだけど。自分の方で悪気さえなければね、どんな人だって決してその、付き合えないことはねえっていう。で、また、ある程度ねえ、気に触るようなことを言われた経験もある。これはお得意さんじゃなかったけど、周りの人からね。むかついて、本当にやり込めてやろうかなと思った時も、ねえわけじゃない、あったけども、こんな馬鹿者に構ってもしようがねえと思って。どうせその人とは商売するわけじゃないから。周りからいちゃもんつける人だってなかにあったよ。だからやっぱ、「あんたには何の関わりもねえんだから」と言って、たった一言で済まわして。その、悪気さえなければね。どういう所だって付き合っている、住んでいける。で、自分で邪な(よこしまな)気持ちさえ出さなければ、相手はやっぱり信用してくれるしね。それがやっぱり、その考え方でやってきたもんだから。金にはならなかったんだろうけども、生きることだけは十分生きてるっていう。だから、実はその日その日のあの、今日はこういうことあった、こういうことあったってやつ。夕飯食べて一杯飲んでもね、あの、たった1行でもいいが、書き留めてある。

思ったことを書いてある。あの、あったことじゃなくして、自分でその、いわゆる書いて、飲んで。そうそう、それを見たら何月何時かに、おれこういうこと思ってたのかっていうのがすぐ分かるね。あれ整理したら、あとでもっと年取ってから見たら懐かしいだろうし。「ああ、このお母さんは今ごろどうしているかな」というふうに、やっぱり思うだろうね。かなりあるよ。そうだなあ、このくらい厚さあるだろうな。

<土地の切り売り>

その経済的な効果というのは、行商の恩恵に預かったということは、すごくあった。その金で結局こんにちまでこらえてこられた。それが無くなって、角田の、この部落の産業としては田圃や畑は御覧のような状態だ。漁師は漁師で小遣い稼ぎ程度で。いまは、大きな経済的基盤は浜茶屋があるだけで。観光のもとというのは行商が無くなってどうしようもならない土壇場まで追いつめられて、それならばということで始まった仕事だからね。ところが、そこから大きな効果があがってくるわけじゃあないから、そこへ投資した金というのは、角田に昔からあつ

た土地、いまは3分の1、いや半分くらい全部人に渡って、そこには家を新しくした人もあるだろうけど。山林も畑も田圃も売って。自分は何の気なしにそうしたんだろうけれども。それが子供や孫を育てる基盤になるかという、決してなりはしない。そこに居座っていられる土地があればなんとか住めるんだけれども。それも無くなると、住めなくなりますよ。いま経済的な不況がくると、とんでもない結果が生まれてくる危険性を角田ははらんでいるね。

<仲人をする>

うちだから、何かしら。あの、こう、お世話になってる人に残さなければだめだっていう、おれ自体もそう思ってるし。で、「何もおれ、残すことないから、また残す力もねえから、お前さん、あんたん所へ息子の嫁さん、あのおれがみつけてきてやるわ」って。で、嫁さん、「おめえ、あそこへ嫁さんに行かぬえか」って言ったら。んなあ、おれ全然結婚なんてのはその、どこの人だか分かんぬえ人だから。ま、一応、いいか悪いか、「おれの人間性を信用してもらえばそれでいいから」って言って。ま、一応、決める決めないは両方が決めればいいんだから、会うだけ、どういう人間だか、息子さんの方にもそうだし、娘さんの方にもそうだから、どういう人間だか、一応会うだけ、「会うまでのやつはおれがやってやるから、その後は2人で決めろ」って言って。そいで会わした。そしたらまあ、そりゃあ1回、「最初も最後まで、こいで会うだけであって、後おまいら決めるんだからそうしない」って。そしたら、やっぱり両方が「それでいい」ってことになったのか。そんで仲人はおれは遠慮するから、そしたら「どうしても仲人をしてもらいたい」って言う。最終的にそうなっちゃった。しょーおもない。ばあさんと2人で仲人に行ってきたよ。「これだけ、おれの置き土産として残していくからね」って言って、それで帰ってきた。

(お嫁さんは) あの、同じ茨城町の人だよ。お得意さん。始終、しょっちゅう行ってるうちでね、彼女はあれ、小学校、確か2年生頃から行ったと思うんだ。とにかくおりゃ帰ってくると、ちょうどいるとねえ、今日も宿題だって、親たちが仕事に出ていないし。「で、どういう宿題だ」って言って、1時間でも1時間半でもそこへ見て、つい。

(だから、小さい頃から) 知ってる、知ってる。そしたら、自分の娘がね、2年生か3年生の頃、学校で先生がその、自分のうちの親戚のことを、何か話し合いとか質問とかあって言われたら、おらあ、「私はあの、新潟に親戚がある」って。「新潟のどこにあるの」って言ったら、「新潟の毒消し屋だ」って言って。先生は「毒消し屋」って言われたって分かんないわけだよ。そいで、「今度親たちが父兄会やなんかに行ったら先生に言われて、母親が大笑いした」って言って。あとで教えてもらった。「毒消し屋さん」と親戚だ」って言って。あの辺の方はいわゆる親戚ってやつは「うちのなか」って言うからね。茨城の方の人たちがね。親戚って言わずに「うちのなか」って言う。うちんなか、毒消し屋、毒消し屋のうちんなかだ。

そうねえ、まあおれは親戚、お客さんだしね。そのう、商売そっちのけで人間と人間との付き合いだと思ったから。やっぱそういう考え方でいたったし、たまたま今日はお昼、お昼食べ

てからその、いわゆる娘さんの実家でね、「来年の2月、息子、弟が結婚式だからどーおしても2月12日に結婚式やるんだから、どーおしても出て来い」って、おばあさんが、おばあさんが電話よこした。「もう少しほけたし、車っていったってちょっと無理だからなあ」って言ったんだけど。「なんとか電車でもなんでもいいから出てもらいたいんだ」って言って。

その娘の弟がね、まあ、おれいる頃から遊んであげてたっていうより、その、弟は、彼女はいたっらしいんだけど、いや、彼女はいたったんだよ。その、ところが、おれがいた年、彼女の母親がね、ガンか何かで死んだんだわ。それでやっぱり、1、2年、お母さんが死んでるのに、「それはちょっとどんなに急いでも、1年間喪が明けるまでは、待つてやるのも礼儀の一つだよ」って、おれ、そのおばあさん、親たちに言ってきたんだよ。結婚を延ばしても二人の気持ちが変わらなければいいんだから。「あの、最低喪の明けるまでは1年間ね、結婚式はやらん方が娘さんのためにもなるし。それから父親も安心するだろうから。喪の明けるまではこっちであの、遠慮して延ばした方がいいよ」って言ったら、「そういうもんかな」って言うから、「いや、そういうもんだって、そうすりゃ間違いねえから」。

結局、もう1年延ばした格好になるね。そりゃ良かったなと思って。そうすりゃ本当に今度、何のこだわりもなく結婚できるから。「そりゃ良かったね」って言って。なんだかんで、出てこれば、毒消し屋、おれのこと「おじちゃん、おじちゃん」って言うから、「おじちゃんが来ねえとあの、様になんねえから、おじちゃん、どうしても出てもらいたいんだ」って言って。

<遊びに来る>

おばあさん、何年か前に「おばあさん、新潟へ行ってみてくっか」って言ったら、「うん行く」って言って。んで、車に乗っけてこうして3晩の夜、ここであれだわ、寝泊まりして、泊まってって。お客さん、そうだなあ、15、6組ここへ、ここに連れてきたよ。(何人かずつ) そうそう。あの、おれの車5人乗りだから。おれと、多くて結局4人しか乗れないわけだ。だあら1年じゃなくして何年かの間にね。かなりの数来てるよ。(海水浴を兼ねて) そういうわけじゃない。向こうはだっ海水浴、大洗のすぐ側だもの。

(角田に行ってみたくて言われた) そうそう。あの、毒消し屋っちゃあ、どういう所から来ているのかやっば向こうも好奇心もあるだろうし。「いいよ、あの、別に、その、気遣いするところでなし、うちったって倅がそんな気遣いさせる男でねえから。いいよ、じゃ行こうよ」って。1週間ぐらい前になんか実家に行きたいんだけど、誰と誰がいいからねえってって、うちに電話して来てくれ。そしてかなり来たわ。

別に驚くたっって、こんなうちだから。別にその、あれだろうけども。あのね、茨城の人たちが来ると、新潟へ来て何よりも驚いたのは仏壇が大きいっていう。新潟の方の仏壇。富山、石川ね、ま、とにかくこの新潟。仏壇はでかいし、仏壇には金かける。先祖を大事にするっていうより、あの、仏教が結局盛んだったんでないですか。他に何にも言わないけども、あの、でかい仏壇にはぶったまげたっ言う。茨城あたりだったら仏壇たっって小さい、そうそう。そ

れだけ言うわ。「何代」って言うから、何がどう、何だか分かんないけど、「あれ親父が買ったんだ」って言って。

<隠居屋>

(茨城には) 隠居屋あるよ。ほとんど、ほとんど隠居はあるよ。ここらの場合、インキョ、カンキョっていうのは、もうごく当たり前だからね。隠居とか閑居とかってやつ。インキョのインキョのこと、カンキョって言うんだよね。隠居は、そうねえ、農家の場合は隠居のない家っていうのは少ねえわね。

(家は) 同じ屋敷の中で。二人だけで住んでるし、またあるいはね、自分の子供をまだ小さい時は、子供を連れて行ってそこで暮らす場合もあるし。だあ、隠居と表(おもて)って。うちあたり、ま、うちの場合はおれとばあさん、ばあさんとどっかへその辺でうちを作って、そこで結局暮らすとする。そうすつと、向こう隠居、ここのうちのこと表って言う。表、母屋、表って言う。

(隠居部屋は) あの、今ほとんど壊したし、うちを建て替えてくから少なくなっけども、昔は、子供の頃はいっぱいあったよ。チュウモンってやつは。今で言えばお年寄りの部屋だけども。どういうわけであの、チュウモンで言ったのかねえ。チュウモンで言ったわ。今あんまりチュウモンで言わないね。あの、言葉も呼び方もだんだん変わってきたしね。

<地 名>

ほとんどこの、囲炉裏の縁(ふち)だ。凍らないために囲炉裏の縁へその、キツを掘った。まだこの、あの、下にあるはずだよ。その台所だったら完全にあるしね。

(キツは) ある。今でもある。そのままにして。うちあたり何にもあれしないから、この下、あるかどうか。ここに敷(ひ)いた覚え、経験はあまりないけど、そこは敷(ひ)いたったから。で、みんながそこに生活してる居間だから、そこは完全にある。今でも残ってるよ。壊さないから残っているわけだ。ほとんど囲炉裏の周りだった。どこのうちでも囲炉裏の周り。キツって言う。そこがキツだって言って、キツの向こうかわにある明かり取りの、今みたいにこの、ガラス窓が少なかったから。その、キツの結局向こうかわ、ハマ側の方をね、裏田地(ウラデンジ)って言った。ウラデンジ。

ウラデンジってやつはね、デンジって言葉は、田圃の地って確か書くと思ったなあ。どいういわれがあるのかなあっていう、おれまだはっきり分からんけども。場所としては裏田地って言う、裏田地。だから前田地(まえでんじ)もあるわけだね。その場所のことを裏田地って。裏田地ね、なんという、どういう意味合い持つんだかね。行き交わる程度でね、そういう言葉を言ってただけど、あれ忘れちゃった。場所のことを言うんだからね。それ、なんの言われを持つのか、そこまでは分からんけどもね。その、前の、いわゆる、ま、うちあたり何も庭木なんか植えてはいないけども、前のそこを坪床(ツボドコ)って言ったね。ツボドコ。ツボの床。前の庭のこと。今、子供、孫たちにツボドコって言ったって、倅だって分からんでしょ

う。ツボドコなんて言ったって……孫は完全に分からないよ。

Ⅲ 考 察

まず始めに、斎藤さんが志願兵としてアジア太平洋戦争に従軍したことから考察を加えてみることにしたい。斎藤さん以外の人たちを含めて、アジア太平洋戦争に参戦した事情について聞いてみると、角田の人々は国のために戦争に行かなければならないという意識を持っていたといえる。「あの頃の世間一般の風潮ってのは、いまでも悔やまれるんだけど、だいたい年になれば、軍隊に入るもんだという、入らなければ、なんか、こう白い目で見られるような情勢であったことは間違いない。」また、「いや、それは、家族や何を犠牲にしても、国家を守るもんだという、そういう見方だったね。それで統一されていたみたい。だから、人間一人ひとりのことを全部犠牲にしてもという、そういう体制だったね。」と述べられている。このことから、その当時国家や国民という意識が既に形成されていたことが分かる。と同時に、国民を守るためにではなく、国民を犠牲にしても国家を守るために、社会体制として強制的に国民を戦争に協力させていたことが分かる。どの家の女性も国防婦人会や愛国婦人会に加入させられたり、満蒙義勇軍や角田義勇隊に参加させられたり、在郷軍人会の郡会長が強大な力をふるい、また学校では六大節に教育勅語の読み聞かせがあったり、国民全体を戦争の遂行に協力させる体制作りをしたのである。このように、当時は好むと好まざるとにかかわらず戦争に協力しなければならぬ状況に置かれていたことを理解する必要があるだろう。

日本の国家は、近代における国民支配の末端の装置として家制度をつくったが、この家制度は日本の民俗文化としての「家」を踏まえて形成・改編されていたために、当時はもちろんのこと戦後においても庶民に大きな影響を与えてきた。そのため、「家」は庶民の生活を防衛する保塁であるにもかかわらず、国家に対しては無抵抗であったのである。こうした傾向は、先に見たように、「家」以上に村落（部落）は無抵抗であった。すなわち、部落は角田村の下部組織を成していたが、出兵にさいして部落単位で壮行会を開き、出兵のさいは村の人々が出て旗を振って見送っている。こうした光景は、政府・軍部が行政上の組織として部落を利用して村人を戦争に駆り出したことを示している。村落（部落）が行政上支配の末端機構を形作っていたことに加えて、さらに国家を支える末端機構にまで飼い慣らされていたのである。従って重要なことは、このような状況下において部落が村人の監視装置として機能していたことをきちんと認識する必要がある。

それから注目されることは、斎藤さんが志願して兵隊になった背景に、しかもわざわざ電信兵を受験した背景に、すぐに家業を継ぐ前に自分の能力を試してみたいという動機があったことである。「やっぱり、出て自分なりに（家業の農漁業とは）違ったことをしてみたいという希望が、当時あったね、確かに。（自分の力を試したい、発揮したいという）そういう意思是十分あったね。（長男であれば、家業を継ぐことが）それはもう確実に決まっていた。なんかし

て違ったことをしてみたかったことはあった。いまでも、その気持ちに変わりはないけどね。だから、(父親が)『うん』と言わなくても、自分で志願書を書いて出したんだからね。(家を継ぐ前に自分の能力を試したかったという)それは、確かにあった。(通信兵を選んだのは)それはね、志願する時に通信兵は点数が一番多くなければならなかったんです。一番むずかしかった。17、18だったから、もう2、3年しゃばにいたったから、分かっているわけだ。わざわざそれに挑戦したんさ。だめだったら、何でもいいというような。」このように、若者が自分の能力を試すために志願兵になっていることについては、従来あまり注目されることがなかっただけに注目しておきたい。それから、村の人々が民政党か憲政会を支援しており、村人はどちらかの政党に二分されていたことも注目されてよいだろう。

次に、「家」の様態について考察してみることにする。実際の庶民の「家」では、女もまた男と同様に有能であり、責任ある仕事をしていたが、法律上は女性差別を前提とした家制度が強制されたのである。家制度が施行されて以降は、家制度が庶民にもしだいに影響を与えるようになったと思われる。しかし、家制度は何よりも男性中心原理によるイデオロギーであり、家長権の強化・再編をもたらしたものと思われる。たとえば、女たちが売り歩く鰯や塩、野菜などの売上はすべて父親に差し出されている。「魚、魚はこっちで取るけども、金はそっち(父親)の方。(母親がお米とか畑のものを売った代金)それもルートは同じ。」つまり、一家の財布は父親が握っていたのである。ここに、父親が家産管理権ではなく、家計管理権とでもいえるものを持っていた姿を垣間見ることができる。こんにちの理解では、百姓の家でも家長は家産管理権・祖先祭祀権・家の代表権・人事権を強弱の程度はともかくとして持っており、それゆえに家父長制であったと考えられているが⁶⁾、上記のような日常生活における財布について家産と区別してきちんと考えるためには家産管理権とは別に家計管理権を付け加えたほうがよいと考えられる。

しかしながら、こうした「家」の様態は、地域差や階級差などによって相違していた。半農半漁の家で、なおかつ女の出稼ぎが盛んな角田浜のような村では、「家」は必ずしも男性原理によって構成されていたわけではない。次男や三男は大工や左官になるために、家を出て東京や会津などに行き、親方の弟子入りしている。斎藤さんの場合は、跡継ぎだったので大工の弟子になることはなく漁業に従事しているが、子供の時は漁を手伝うことはなく、将来漁をするために浜に出て漁を見ていた。そうやって、漁の仕事を小さい頃から覚えていったのである。そして、親がカクノヒトとして乗っていた船に長男もカクノヒトとして乗ることが慣習であった。ほかの人の聞き取りでは、農業を主とし漁業を従としていた家の人の場合、長男が親とは別の船に乗ったケースもあったことから、世襲がそれほど厳しくないように思われる。これまでの調査研究で、漁業仲間は本分家というよりも兄弟姉妹や友人・知人関係にあった人で組まれており、本家層が卓越した経済力を有していたわけではないことが知られている⁷⁾。

家のなかの仕事は、畳や廊下の拭き掃除は男女を問わず子供の仕事であり、風呂の水汲みは

一般的には女の仕事であったという。しかし、玄関の掃除や草むしり、落ち葉拾いなどは子供の仕事ではなく大人がしていた。男の場合は、未婚の女が身だしなみとしておこなっていた裁縫は習うことが求められていなかった。他方、山の手入れは男の仕事であった。また、斎藤さんの家でも野菜や蠶の地元での行商は、女の仕事ときまっていた。かてて加えて、多くの女が毒消し売りの行商に出ていたため、その間は男が家事などすべてをせざるをえなかった。このように見ると、角田の「家」では男女の性別分業が小さい頃からあったのではないことが知られる。そして、妻が毒消し売りに出ているために、おばあさんがいなければなおさらであるが、夫が家事一切をしなければならなかったのである。「(男が) 別に台所に立ってもおかしくないんだと、この土地に住んでいる人たちはそういうふうに観念づけられていたみたいだったね。まさか、子供に食わせないわけにはいかないしね。」このように、角田浜の「家」では、「男は外、女は家庭」という性別役割分業観が必ずしも形成されてこなかったのである。

大人になるにつれて、男女別々の仕事に分かれていくことになる。たとえば、毒消し売りから帰ってくると、女子会が主催して裁縫会がおこなわれた。講師は新潟から臨時に3か月ほど頼んで来て教えてもらった。女子会は村が20円補助していたが、その後は村の裁縫を女子会に頼んだり、あるいは毒消しから帰ってくる時にお土産を一手に引き受けてその利益で会の経費を賄ってきた⁸⁾。こうした村落(部落)の姿は、村落が村人の生活を補完する機能を果たしていることを示唆している。と同時に、着物を縫えるということは、女性にとって少女から女へと移行する象徴的なものであったことが知られる。

斎藤さんが出兵する時の家の構成をみってみると、いわゆる「大家族」であったことが分かる。両親と父親の妹、モライゴの父親の妹、それから斎藤さんの腹違いの姉が2人、妹と弟の合計9人住まいであった。戦後、弟は父親の妹の養子になり北海道に、父親の妹は村内に嫁ぎ、腹違いの姉は同居していた父親の妹と2人で村の共有地を借りて分家し、もうひとりの姉は村内に嫁いでいる。このように、家族に加えて親族を「家」の成員として抱えており、戦前までは「家」を構成していたことが分かる。また、家の跡継ぎは長男であるという規範は、斎藤さんの家でも見出される。斎藤さんが長男でありながら志願兵になったことに対し、最後までそれを認めようとしなかった父親の態度は何よりもそれを物語っている。

斎藤さんの家は本家であり、現在村内に分家が3軒ある。斎藤さん御夫妻は長男家族とは同居しているが、三男は村内に分家している。その三男の小学生の外孫は毎日のように遊びに来ている。また、昭和28年にオバと姉が分家した家と嫁いだ姉の家があるが、現在いずれも1人住まいであり、毎日のようにお茶飲みに来ている。このように、本分家関係というよりも親子や兄弟姉妹の間柄にある人たちは、日頃から頻繁に行ったり来たり付き合いをしている。それに対して、本家分家といった系譜関係の間では、密接な付き合いが見られない。現在でもいざという時に分家は本家を理念的に頼りにしているにもかかわらず、それに応えるだけの経済的力が無いケースがでてくる。本分家関係においては、既に以前から実際の経済力と観念にお

ける権威との間にギャップが出ている。斎藤さんの家の場合はこのギャップが顕在化していないが、本家が角田浜から離れて移住してしまった場合はもとより、たとえ本家が角田浜にいる場合でも、このギャップが多くのケースで見られるのである。

ところで、斎藤さんの家は田畑を持っていたわけであるが、畑では春には麦や菜種、夏にはスイカ、冬には大根を作っていた。春の大羽鰯は生で売ったが、小鰯は塩漬けにして、西川町から升湯、湯東村まで10月頃に売りに行った。このように、斎藤さんの場合は巻町の周辺の西川町から湯東村にかけて売りに行っている。隣の五ヶ浜や角海浜の人たちは、それより南の村々に入って商いをしていたので、斎藤さんの家ではその村には行かないようにしていたという。村人の行商範囲はほぼこの周囲一帯であり、巻を中心として農村のザイ一帯が地域の経済的市場圏を形成していた様子が窺われる。篠田さんは生の鰯は主に巻町で売り、塩は湯頭、スイカは内野に売りに行っていたことなどを踏まえると⁹⁾、同じ村であっても人によって行商に行く先が違っており、この村の人はここといったような村ごとに厳密な縄張りはないことが知られる。こうした状況から、地元周りの行商においては、村落の単位が村人が行商先を決める上で強く規制していないことを示唆しており、それゆえに一応の縄張りを踏まえて各人がそれぞれ行商先を開拓していった姿が読み取れるのである。

男は海の上で魚を捕り、それを売るのは女の仕事という性別分業があった。こうした性別分業は歴史的に形成された伝統的なものである。そのため、年のいった男が一人で初めて商売して歩くとなると、それはたいへんなことであった。それについて、「抵抗感ねえなんでもんじゃあないですよ」と述懐している。最初に出かけた時は、途中まで行きながら、「こっからうちへけえろうか」と後髪を引かれている。以前に取り上げた加藤キクさんが「率がいい人が出る」と述べていたように、庶民の間では性による分業が必ずしも明確になされていたわけではなく、稼ぎのよい方が出ればよかったのである¹⁰⁾。斎藤さんの家の場合でも、男女の性差による「男は外、女は家庭」という役割分業が見られないことは注目されてよいだろう。たとえば、自分の家から味噌を行商先まで持参しているが、斎藤さんは出稼ぎ先では自分で毎日料理をしていた。漁師をしていた斎藤さんは魚をおろすのがうまく、料理をするのが苦にならなかったと言う。こうした背景には、漁師が船の上で釣った魚を料理してきた経験がある。こうした漁師が置かれていた状況に加えて、妻が毒消し売りに出ている間は夫が家事や子供の面倒をみなければならなかったという事情もある。このように見てくると、高度経済成長期以降においても、角田浜の家では「男は外、女は家庭」という性別役割分業は成立しなかったことが分かる。

次に、斎藤さんの毒消しの行商の過程について考察を加えてみよう。まず、斎藤さんが毒消し売りを始めるきっかけであるが、それは彼の妻が病気になり出られなくなったことである。掛け売りしてあった未回収のお金を集金するために妻と一緒に出かけ、それで毒消し売りはやめようとしていた。斎藤さんが行商に出た当時（昭和45年頃）は、村のなかで行商している人は既に10人くらいしかいなかった。毒消し売りは、このように衰退の一途にあり、当時の

人たちが年を取って引退すれば、毒消し売りに出る人がいなくなるという状況にあった。こうした状況は戦前から毒消し売りに出ている人々とは全く異なっている。すなわち、斎藤さんは弟子になることなく、妻と一緒に歩いてお得意先を覚えるということや車で行商するということは、戦前ももちろんのこと戦後の昭和30年代頃までは見られなかったことである。

初めて毒消し売りに一人で来た晩は、グロッキーになるくらいお酒を飲んで寝て、翌日掛け売りして貸しがあった家を集金に回った。こうして斎藤さんが未回収のお金を回収して歩いたさいに、今度またこうした家々から注文を受けたのである。ところが、注文された品物はたまたま車に在庫がなかったので、その翌日間屋に仕入に行ってお客さんに届けたのが初めての商売であった。「はあーっ、商売っていうのは、こういうもんかなあと思って。今でも決して忘れやしない。……忘れやしない。やっぱ一種の感激だったわ。感激だった。」斎藤さんの語る言葉のなかに、その時どれほど忘れられない経験をしたのかが如実に語られている。

斎藤さんの行商の特徴としては、戦後遅れて彼は行商を開始したので、親方を持っていないことが挙げられる。また、戦後は薬事法の改正によって、薬の製造が勝手にはできなくなり、製造会社から配置販売員という肩書きで行商に出ざるをえなくなった様子が見られる。

ここで、毒消し売りの過程を通して見出される点について、女性の毒消し売りと比較して性差による相違について考察しておきたい。男で毒消し売りに従事したのは1人か2人しかいないので必ずしも一般化できないかもしれないが、男性の特殊性と思われるものを取り上げ、性差による相違について考察してみることにする。この点に関して、まず、稼ぐということについての意味、すなわち稼いだお金に対する感覚の相違があげられる。たとえば、篠田さんは爪に火を灯しながら、お金を稼いでいる姿が聞かれた。宿でストーブを買わずに、長い間「焚き落とし」の炭火で暖を取ってきたことを述べていた¹¹⁾。こうした姿は、前浜ミエさんの場合のように女手ひとつで子供を育ててきたのみならず、どの女性にしても大なり小なり似たようなところがあるように思われる。それに対して、斎藤さんはいわば金銭の勘定を度外視して行商してきている。こうした勘定を度外視した姿勢は、むしろ男性に見られる特徴であるように思われる。ある家での調査では、大工の出稼ぎに行き帰って来て、お盆の上に出したお金がチャリンという音がしたという話を聞く機会があった。斎藤さんが、一軒の家を建てて住み車で行商していたということは、同時代に薬や金物、雑貨などを行商して売って来た女性たちからはついぞ聞いたことがない。必ず何人かで共同して借家している。女の一人住まいは危険であるという事情もあろうが、複数で借りれば一人当たり安くなるというという考えに拠っている。それに対して、斎藤さんは家を建て、車で行商し、酒を飲むという生活をしていただけで、その暮らしぶりは爪に火をともした女性の生活からはほど遠い。こうした違いを時代の相違に求めるよりも、むしろ男性と女性とが家のなかで置かれている立場の相違に由来していると言ったほうが適切であろう。「だから、家があるもんだから、1人でも行けたんさ。そんなきゃ、1人でととてもじゃないが、行く気にもならないし、行けないよ。」と述べているのは、何も男

が女よりも気が弱いことを示しているのではなく、言外に家のなかにおける立場の相違を物語っているのである。また、加藤さんや篠田さんのお話しでは、「嫁の働き」があるということが家制度を考える時に特徴的であった。このことは、嫁という立場が何であるかを物語っている。それに対して、男には「長男の働き」という言葉はない。こうした言葉の有無が何よりもそれを物語っているのである。

なかでも、斎藤さんがお得意さんに「置土産」として嫁の世話をしたことは、両者の関係の性格を象徴的に示唆している。一般的に、仲人は職場の上司など社会的に世話を受けることが期待できる人に依頼されることが普通である。しかし、両者の仲を取り持ったとはいえ、行商の人に仲人を依頼することはよほどのことである。であるがゆえに、こうしたことは行商人とお得意さんの関係が何であったのかを象徴的に物語っているのである。

それでは、これまでの交換理論からすると、毒消しの行商行為はどのように理解できるのだろうか。伊藤幹治は先行研究を踏まえて次のように整理している¹²⁾。まず交換の形態には市場交換（経済的交換）と贈与交換（社会的交換）とがある。これらは、いずれも返礼が義務づけられている点で共通しているが、後者は返礼が期待されるけれども、それが義務づけられておらず、相手の裁量に任されている点で意味を異にしているのである。さらに、贈与を御礼の言葉と交換される贈与と贈与が義務づけられる贈与、贈与者が返礼を期待している贈与の3つに分けている。しかしながら、伊藤がいみじくも指摘しているように、贈与と交換とは明確に区別することができないものがあり、「贈与と交換がもつれあっている」。日本などでは、「ほとんどの贈与が交換ともつれあい、交換のなかに組み込まれている」のである。その例として、バレンタインデーやホワイトデーの贈り物をあげている。つまり、贈与されるものが市場で取引される商品になっていて、「現代資本主義社会では、贈りもののほとんどが、非人格的な商品によって占められている」のである。伊藤が「贈与と交換ともつれあい」を見抜いたことは卓見であるが、贈与のみが取り上げられているのは一面的である。交換と考えられているものにもまた贈与ともつれあっているものがある。たとえば、毒消し売りの斎藤さんとお得意さんとは薬と貨幣の交換であることは明らかである。しかし、それが単なる交換（社会的交換）に還元できるものではない。たとえば、市場での取引関係と同じであると割り切れるならば、斎藤さんがお客さんのおかげで商売できたとは考えないであろう。「こっちで、その、商売をしたんじゃなくて、お客さんにさしてもらったんさ。そんなもんだ。言い換えれば、確かにそうだ。（今まで経験がない）そう。全然ないわけだから。向こうから商売教えてもらったぐらいのもんだ。」「お客さんに（商売を）さしてもらった」という気持ちは、物を売るとか、あるいは商いをして儲けようという自己中心的な姿勢だけからでは理解できないものである。そうした見方・姿勢には、交換の行為のなかに物に還元することができない、目に見えない「贈与」を見ていると言ってもよいだろう。

竹沢尚一郎が分類した「一方的贈与」・「非対称的贈与」・「対称的贈与」・「一般的交換」の4

つの形態においてもまた、贈与を伴う交換形態が見落とされている¹³⁾。それでは、どうして市場での交換でありながら、贈与に近いものになるのであろうか。あるいは、贈与を伴う交換になるのだろうか。それは、端的に言えば、交換する人が互いに決まっており、「社会的交換」もしくは「一般的交換」ではなく、「限定交換」になるからである。双方が互いに限定されているからこそ、交換が贈与の性質をおびてしまうのである。レヴィ＝ストロースは、後に「限定交換」を「一般交換」のひとつとして下位形態に位置づけたため「限定交換」の形態を放棄してしまったが、両者は交換の性格が異なるものであり、「限定交換」の性格をとらえそこなわせる結果になってしまった。いずれにしても、毒消し売りの人々の行商は、「限定交換」という形態が持つ独特の性質があることを示しているのである。

それにしても、何がこのような「苦しい」行商をさせているのだろうか。これまでおばあさんたちの毒消し売りの行商の話をお聞きして、一番疑問に思ったことはこれであった。それは、果たして「家」のためであると言ってよいのだろうか。そこに、「行商の文化」を理解する鍵があるといえるのではないだろうか。

そのひとつは、毒消しの行商から大きな収入をあげることができた点を指摘できるだろう。こうした話は行商を続けていたほとんどの人から聞くことができた。昭和15年の「新潟毎日新聞」(12月20日付)には、「年額30万円を稼出す郷土のホープ」として1,600名の毒消し売りが紹介されているが(平均では1人約1,875円にもなる)¹⁴⁾、この記事はいかに毒消し売りがもうかったのかを伝えてくれている。しかし、人によってはあまり利益をえることができなかった人もいて、必ずしも全員がもうかったわけではない。独身の時に行商に出てもそれなりの収入があげられなかった人は、結婚した後には行商に出ないのが普通である。「毒消してのは、その、早い話が、腕のいい人と悪い人がいる。腕たったって結局、その、商売の上手な人と下手な人で、えらい差があるんだ。」従って、毒消しを続けている人はそれなりに収入があった人であるといえるだろう。

それから、毒消し売りは小遣い(ホマチ)をつくることができたことがあげられる。この点は、毒消し売りと地元回りの商売との相違点として指摘できるだろう。毒消し売りでは小遣いが得られたのに対して、地元の周囲を回って野菜や鰯を売るのはいくらで売れるのかについて、誰でもおおよそ計算することができたため、売上をごまかして父親に手渡すことはできなかったのである。尤も、毒消し売りのほうは「腕のいい人と悪い人がいて、いくら売り上げられるのか分からない。「商売の上手な人と下手な人で、えらい差がある」ため、売り子は自分の小遣いを差し引いて、家長である父親に売上代を手渡すことができたのである。そうした事情があるために、女性は小遣い(ホマチ)を持つことができたのである。尤も、こうしたホマチを女が自分の勝手に使ったわけではなく、子供や夫など家族のために使っている。にもかかわらず、女がいつどのようにお金を使うのかといった決定権を持つことができたということは注目されてよいであろう。しかし、こうした行商をするのはきまって女の仕事であった。斎藤さ

んの場合も、母親や妻の仕事であった。この職業選択それ自体に決定権はない。女が行商をする理由として、斎藤さんは男が頭を下げるのがいやだということと恥ずかしいという理由を挙げている。百姓の仕事に触れて、斎藤さんの母親は「こんなに苦勞しても、さっぱり金にならないんだが。行商に行ってる方が、なんぼう楽だか分かんねえ」とぼやいていたことを覚えている。どうしてこのようなボヤキがあったのだろうか。それには以下のような理由があるのではないだろうか。その理由の一端は、母親によって毒消し売りに出た場合と出ない場合とが比較されて語られている。毒消し売りに出た場合のほうが、家でずっと舅や姑と一緒にいるよりも精神的に楽であり、なかでも収入がよくて小遣い（ホマチ）をつくることのできる事情があげられている。母親のボヤキの裏には、こうした事情があったのである。

それからもうひとつは、行商による売買が単純に経済行為とはいえない経済的・道徳的・社会的な「全体的関係」である点を挙げることができる。市場社会の原理は、利害損得の計算のもとに取引が成立するものであるが、斎藤さんの「置土産」に見られるように、その「置土産」は決して金銭で数えられるものではなく、両者の間で互いに交換される様々なもののひとつ以上のものである。「20年間商売やって、暴利だけはやらずに来た。……自分の、ここで飲んで、掛かりを掛けたあの経費を払って、それでうちへける時裸だって、なに構やしないと思って。うちへ帰るだけの物があればいいやって。」と思って行商している。こうした行商の姿は、お得意さんとの間が単に経済関係であるとはいえない側面があることを示している。すなわち、行商人とお得意さんの関係が単なる金銭上の取引の関係ではなく、何よりも人格的な間柄であることを物語っている。物を売買する関係にあつて、それは経済的であるのみならず、同時に道徳的関係なのである。また、斎藤さんのほうから、いくら貸していると言わなくても、借りたほうがきちんと借りた金額を覚えておいて、それをきちんと支払ってくれていることからそうした関係が知られる。「顔出せば黙って向こうの方から、『あの、おれまだ借りがあつたんだから払うよ』って言って。こっちから『くれろ』、『あの、頂きたい』って言わなくたって、向こうでちゃんと自分で知ってるから。きれーいに払ってくれた。それこそ、1円も残さずに払ってくれた。だから、顔出したら、全部あの、向こうの方で覚えてるから、払ってくれた。」先方がきちんと借りた金額を覚えていて全額返してくれたことは、毒消し売りの行商が互いの信頼関係の上に成り立っていることを物語っている。また、それゆえ反対に、お客さんが「『今ちょっと都合悪いからこんつぎ回って来るまで』って言えば、『あ、そうか』って言って置いて来る」ということになるのである。

斎藤さんは日記を付けていたわけであるが、そのなかに注目すべき事柄がある。行商を辱められた時、斎藤さんは怒らずにじっと耐えていた。そして、「きょうの忍耐は忘れるな。時間は考え方によっていくらでも消費できる。その技術を見つけることに真剣に取り組むこと。人知れず己の体の傷みをば、そとに知らせず、身のさびと知る。がまんすればできる。」と日記に書いている。行商という行為が、いかに人を育てる道徳的なものであるのかを伝えて余りあ

るだろう。

この点に関して、篠田さんが巻の町場で鰯を売るさいに、買いに来た人がずるいので売るのがいやになったと述べていたことが想起される。「そうしてね、車見て買いに来るんだけど、5匹くらい買う人はね、15匹もね、蓋出して下から取っくりかえして、こうして並べてさ、いくつ買うと思えばさ、5つぐらいしか買わないんだよ。そう思って黙ってこうして見てるんだ。だけど、あんまりいじるとね、腸が出るんだよ、鰯はね。すーぐにね、腸切れるの。「あなたの身体、見ればそんなにたまげて身体大きくないが、あなた欲が深いね」、そう言ったら、「なんで」「なんでったって、深いでしょう。これだけね、どれだけ大きい食べれば大きくなるの。大きいたって、小さいたって、1匹は1匹だし。人間だっただってね、でっかい人だっただって、小さい人だっただって、やっぱり1人分の仕事しかできないでしょう」って言うの。「それを、15匹も20匹も出して、そこからまたいいとこ拾うなんて。そんなに欲の深い人はやだ」、そう言った。「人がせっかく買うっていうのに、このオバアチャン、この人はなんだか、かんだかばかり言ってすかや」。「いや、買ってもらうのはありがたい、おら売らなくなっただっていい」、言ってね。みんなみんな鰯が傷んでしまうでしょう。だからそう言って。「ザイのほうが一番いい」、そう言って、ザイのほうに引っぱって行くんだよ。そうすると、みんな「100円とかさ」、「米1升とか」、そう言うから減りも早いしね、ザイの人はそここのこはいいね。なんにもね、やるのを取るし、またこっちだっただって小さいのばかり拾ってやらないでしょう。上からそっくりね、自分で慣れた人が取ると腸でないんだよ。そういう思いもしたよ。「町はやだな、町の人はやだな」、そう思ったね。¹⁵⁾こうした気持ちは、毒消しの行商以外でも、二者間でおこなわれるかつての売買(「限定交換」)が単なる経済行為ではなく、同時に道徳的・人格的行為であったことを示唆している。このように、売買行為が道徳的・人格的形成の機会でもあったことが分かる。いつも決まった相手と取引する「限定交換」は、単なる経済関係ではなく、道徳的・人格的關係でもあるのである。辛い行商を耐えて続けさせたのは、これらの事情ではないだろうか。

最後に、斎藤さんが将来の角田浜を案じて述べていたことについて取り上げておきたい。それは、角田の人々がこれまで山林などの土地を切り売りして現金にし、それで家を建てたり、子供を大学に出したりしてきたことである。角田の土地の3分の1か2分の1くらいは既に人の手に渡っていると言う。農業と漁業は既に仕事としては成り立たなくなっているし、浜茶屋の経営も息詰まっている。斎藤さんは生活の行く方についてこのように案じている。土地が切り売りされている姿は、日本全国で見出すことができる。21世紀を直前にして規制緩和・自由化が加速されている状況のなかにあって、いまこそ政府・官僚が国民生活を守るべく政策を遂行しなければならない時はないだろう。斎藤さんの憂いは、そのことを痛切に説いている。そして、自分たちの生活を守るためには、同時に何よりも自分たちの姿勢が問われなければならないことを訴えているように思われる。

(付記)

調査は1995年度の社会学演習の一環として、1995年10月28日に実施したもので、参加者は新潟大学人文学部行動科学課程の荒井陽子さんと筆者であった。また、補充調査を1997年4月10日に実施した。調査を快く引き受けていただいた斎藤牛雄さんに深謝申し上げます。

註

- 1) 問題意識と方法については、拙稿「毒消し売りの生活史(1)」(『環日本海地域比較史研究』第3号、1994年)、「毒消し売りの生活史(3)」(『環日本海地域比較史研究』第5号、1996年)を参考されたい。なお、必要に応じて()で補足説明をしている。
- 2) こうした試みには既に中野卓の『口述の生活史』をはじめとする一連の研究がある。また、筆者と必ずしも同じではないが、ピエール・ブルデューは『世界の悲惨』のなかで社会的対話という技法を用いている(パトリック・シャンパーニュ「社会的対話についての考察」『思想』872号、1997年)。
- 3) 4) 2回の調査で、斎藤さんは1回目が物価統制令、2回目が企業統制令と説明されているために話の中に両方の言葉が出てくるが、正確には企業整備令のことを指していると判断される。なお、実際には昭和17年の売薬営業整備要綱(生産企業体は県下一企業体とし、又価格、販売に関する統制を行う等)によっていると思われる(小村弑『越後の毒消し』巻町双書8集、1963年、33ページ)。
- 5) 区長の小川敏夫氏によると、女たちが毒消し売りに出ているので、託児所は大正5年に斎藤所左衛門家が子供たちを預かったのが始まりで、その後三五兵衛家、願正寺へと移り変わり、昭和17年に角田浜部落が保育園の経営に取り組んできたという。
- 6) 鎌田浩「家父長制家族」『事典家族』弘文堂、1996年、243ページ。
- 7) 『巻町史 通史編下』巻町教育委員会、平成9年、155-6ページ。
- 8) 『巻町史 資料編5、近・現代Ⅱ』巻町教育委員会、平成2年、562ページ。
- 9) 拙稿「毒消し売りの生活史(1)」前掲書を参考されたい。
- 10) 拙稿「毒消し売りの生活史(2)」(『環日本海地域比較史研究』第4号、1995年)を参考されたい。
- 11) 拙稿「毒消し売りの生活史(1)」前掲書を参考されたい。
- 12) 伊藤幹治「贈与と交換の今日的課題」(岩波講座現代社会学17『贈与と市場の社会学』東京大学出版会、1996年)を参考されたい。
- 13) 竹沢尚一郎「贈与・交換・権力」(『贈与と市場の社会学』)を参考されたい。
- 14) 『巻町史 資料編4、近・現代Ⅰ』巻町教育委員会、昭和63年、667ページ。
- 15) 拙稿「毒消し売りの生活史(1)」前掲書、55ページ。